2014 年度　浦野ゼミ卒業論文

大阪堀江地区の歴史的変遷

―激変する地域社会と住民　コミュニティによる取組―

主査　浦野正樹教授

早稲田大学 文化構想学部 社会構築論系 5 年

浦野ゼミナール（地域・都市論）所属

1T100226-7　岡﨑　綾修

内容

第 1 章　序章 4
(1)研究の動機 4
(2)研究の目的と方法 6
(3)調査研究対象地概略 7
(4)堀江の範囲と地域名称 9
(4)堀江の交通機関 9
(5)堀江の隣接地域 9
第 2 章　堀江の地理及歴史的環境 12
(1)古代から近世までの大阪 12
古代から中世の大阪 13
豊臣時代から徳川時代にかけての大阪 14
(2)　中世から戦中にかけての堀江 16
堀江新地開発までの堀江 16
堀江新地時代 16
花街と家具屋街の登場 17
(3)　明治年間 19
行政区分変化 19
堀江遊郭許可 19
商制度と産業発達による変化 20
(4)　大正年間から戦災 22
①　大大阪時代の発展と衰退 22
②都市問題による住民入れ替わり 24
戦災による焼失 28
(5)戦後から現在 31
①交通網の変化 31
②戦後復興から衰退期 35
第 3 章　戦後の花街と家具屋街 43
堀江遊郭 43
②南堀江立花通周辺 51
第 4 章　「オレンジストリート」を中心とした取り組み 58
(1)平成以降の環境変化 58
(2) 立花通活性化委員会発足 58
(3)ブランドイメージの設定 59
(4)不動産業者との連携 59

⑸堀江バブルの到来 60
⑹メディア戦略 61
第 5 章　「オレンジストリート」を取り巻く環境.....62
⑴住民 62
（2）家具屋 64
⑶アパレル業者 67
⑷飲食関係 68
第 6 章　成功の要因と現状の課題.....69
⑴成功要因 69
⑵今後の課題.....71
終章 73
参考文献 78

第１章　序章

(1)研究の動機

本研究の動機は、まったく筆者の生活経験によるものである。筆者は本論文の調査対象地域たる大阪市西区堀江地区出身であり、出生の昭和 62 年から高校を卒業する平成 18 年までの間、北堀江三丁目に居住していた。

筆者の本籍地は父親が結婚以前に事務所兼住居を構えていた南堀江三丁目の材木屋上階であり、堀江小学校に進学する際には、その材木屋から手製の木製道具箱を贈呈され、6 年間愛用させて頂いた。材木屋の子が筆者と同窓で同じ道具箱を使用していたことを併せて考えるに、おそらく自分の家の子の分を用意するついでに拵えて下さったのだろう。当時材木屋はその家の他にも複数有り、また、南堀江二丁目にあった銭湯では地域内の廃材を利用していた関係か知らぬが大鋸屑で釜を炊いていたことも相まって、今でも材木の香りを嗅ぐと堀江を思い出す。

それに、堀江地区について語る上で欠くべからざる存在が、堀江遊郭である。但し、料亭は現在 1 件も存在せず、地域の「伝説」と言ってよい。堀江連合振興町会主催で堀江小学校校庭にて毎年開かれる盆踊り大会や、堀江小学校の運動会では堀江盆唄なるローカル盆踊をすることになっていたが、堀江に遊郭があった昔日、芸子により唄われていた歌らしい。確かに、女の声の盆唄は他所であまり聞かない気がする。歌詞も「ソレ堀江 ソレ廓大江の 里げしき」だの、「止めてとまらぬ　こいつぁまた色の道」だのと、少し小学生に踊らせるには適切ならざるようだが、伝統ある地域であるとの意識を継承させる意義を有しているのであろう。

堀江遊郭は今にその面影を残していないが、材木屋以上に多かったのは家具屋である。大阪、正確に言えば徳川時代の大坂三郷の範囲内では南北の道を「筋」、東西の道を「通り」と称すが、赤地に「家具の街　立花通」と白抜きした看板を辻辻に掲げる家具屋街が南堀江一丁目から三丁目まで延々1km 以上にわたり形成されており、堀江是れ即ち家具の街なりと称しても過言ではない様相であった。なんとなれば、他に商店の集積している街路が存在しないからである。

商店自体は存在した。特に地下鉄の駅前に集積しているわけでもなく、スーパーマーケットやら、それに鶏肉店やら酒屋の専門店、あとはもちろんコンビニやら飲食店やらが点在しているのである。その間は、マンションか事務所か倉庫か仕舞屋が埋めていた。

筆者が幼少の頃に抱いていた密かな謎は、東淀川区にある祖父母の家へ向かう間、阪急電車の車窓から文化住宅が延々居並ぶ景観を眺めつつ、「ここらへんの人たちは一体どこで買い物をしているのだろうか」という素朴な疑問である。当然それぞれ最寄駅前に商店街が形成され、郊外型スーパーマーケットも存在するのであるが、「駅前商店街」や自動車で行くような「大型スーパーマーケット」という概念を持ち合わせていなかった。

堀江地区は商店が点在していたと言っても、小学生の目から見ても網羅性に欠いていた。

まず公設市場が平成に入っては既に消滅していた事実からもそれは明らかであろう。精肉店もなければ、玩具店もない。駄菓子屋もないが、堀江小学校の校区に北隣の新町も含まれ、新町地区に 2 軒存在したのでそちらを利用していた。厚生年金会館、現オリックス劇場のあたりにあったそのうちの 1 軒が、先日散策してみると路地ごと消滅していたのは残念である。

網羅性を欠くからには堀江から出て買い物をせねばならぬ。新町地区は堀江地区よりも更に生活圏としての完結度は低く、オフィス或いは住居の様相を呈しており、専門店は甚だ少ない。堀江の東隣、要は一歩東へ足を踏み出せば、所謂若者向けの服飾店や飲食店が立ち並ぶアメリカ村であり、その雑踏を抜ければ大阪を代表する繁華街の一つに数えられる心斎橋に到り着くため、買い物に不自由はない。なお、堀江小学校の制服は旧そごう心斎橋本店にて取り扱われており、心斎橋は商店の少ない堀江地区の商業地区機能を担っていると考えられる。

また、西隣の千代崎九条方面は、明治期に我国近代工業発展の魁を担いし地にして、松島新地（遊郭）も後背に控え、古くは「東の心斎橋西の九条」と称された一大商店街を擁している。南隣の幸町桜川地区には元々公設市場があったが、平成一桁年代にそれがスーパーマーケット内に移り、公設市場内にあった本屋は千日前通りに地域の書店としては比較的大きな店を構え、堀江地区の最寄り本屋となった。

上述した如く、堀江地区は生活圏として完結しておらず、その多くを周辺地区に依存している。しかし、周辺地区とは別の街に住んでいるとの意識は強く共有されていた。堀江に大きなイシューが存在したかというよりも、単純に街の「雰囲気」が大きく異なる事実が、その意識を支えていたと思われる。心斎橋は殷賑の巷であるが、堀江はそうではない。千代崎九条は工業地区であるが、堀江は商業地区である。筆者は「九条はガラが悪いので勝手に行っては不可ない」と親に言い聞かされて育ったが、これは筆者の家に限ったことではなかった。木津川以西の千代崎九条は別の地域であるとの意識が強く、木津川以西は西区ではなく港区であると誤解している同級生も多かった。

よって、どこに住んでいるか問われれば「堀江」と答える他ないが、堀江地区内にある地下鉄駅名は「西長堀」であり、「堀江」という地名を知る人は稀なため、「心斎橋の隣」と付け加えることになる。平成 12 年の大阪府知事選開票速報で西区の情勢について報じる際、「旧市街のベッドタウン」と紹介され、「なるほど旧市街か」と妙に納得したほど、「昔は遊郭など色々あったらしいが今は何もない街」であった。

堀江小学校卒業後、大阪市内の私立中学校に通っていた筆者は、クラス名簿を見た級友から「堀江のようなオシャレなところ出身とは思えない」と言われ、喫驚した。言われて見れば、その数年前から立花通りの看板が「オレンジストリート」に改められたり、廃業した家具屋の後にブティックが開店したりと、どうやら街が変わろうとしている感はあったが、筆者本人としては、「オシャレな街」に育ったつもりもなければ住んでいるつもりもない。

そのうち、地下鉄のファッション誌吊広告で「東京代官山×大阪堀江」と特集が組まれているのを発見した。代官山とやらが如何なる街なのかはよく知らぬが、ファッション誌に登場しているからにはおそらく「オシャレな街」であり、どうやら堀江も「オシャレな街」として取り扱われているらしい。事実、小洒落た服飾店や飲食店は増える一方であり、明らかに街が変わっていると感じた。

元々何もない街であり、それが大阪においては「堀江」と言って通じるようになったのであるから多少嬉しくもあるが、自分に断りもなく勝手に「オシャレ」な街の住民にされたことに対しては、何やら納得いかぬ。

また、筆者が小学生の頃の堀江の商店では関西でも今時珍しいほど「でんがなまんがな」式のコテコテ大阪弁が話される大阪の土着性の強い地域であったのが、急速にスタイリッシュな街へと装いを変えていったのも不満であった。なお、筆者は今に至るまで近所のおっちゃんおばちゃん以外から、京都の「どす」に対して大阪は「だす」であるという化石のような関西方言の違いを実感させられたことはない。

一体誰が、どのようにして、堀江の街を変えたのか。また、昔は色々あったらしい堀江の街は、いつ頃から何もない「旧市街」へと謂わば転落したのか。以上の疑問を解き明かすべく、本論文の題目を定めた。

(2)研究の目的と方法

本論文では、堀江地区が徳川時代の堀江新地開発からこれまで如何なる変遷を辿り、また何時どのような要因で、平成年代の激変を迎えるに到ったのかについて論じ、その激変の成功要因と、現状の課題について述べる。

堀江新地開発から戦前までの変遷については、郷土史資料、人口統計、古地図、絵図、写真等を使用して詳らかに述べる。戦後の変遷については、上記に加えて住宅地図を活用、平成年代以降の激変については、関係者からの聞き取り調査を実施した。

(3)調査研究対象地概略

図 1-1　堀江周辺地図（GoogleMAP）

堀江地区とは、現町名表記での大阪市西区南堀江一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、同北堀江一丁目、二丁目、三丁目、四丁目を指す。行政区分では堀江連合、日吉連合、高台連合に分けられる。面積は約 2 平方粁、平成 25 年現在の人口は 2 万 3,011 人を有す。

堀江は十七世紀中葉河村瑞賢により堀江川が開削されたことによって、大坂三郷中最も新しく開かれた町である。江戸時代から戦前にかけては、道頓堀川、木津川、長堀川、西横堀川、堀江川といった堀川を巡らせた地勢によって、水都大阪を代表する商業地として栄える。北堀江は遊里（明治以降遊郭）を有し、南堀江は立花通を中心に家具屋が集積、この産業構造は明治以降も継続する。

戦災によって堀江地域は全焼、堀江遊郭は青線地帯として復活することもなく消滅するも、立花通は新規事業者が流入し、再び家具の街としての活気を取り戻す。

堀川が埋め立てられた昭和 30 年代以降は衰退期に入るが、昭和 50 年頃から都心再開発により高層マンション建設が始まったことから「旧市街のベッドタウン」として人口が漸次増加、20 世紀末には旧来の「立花通」が「オレンジストリート」と呼び改められブティックやカフェ等が集積を開始したのに加え、タワーマンション建設ラッシュを迎え、「少し落ち着いた若者の街」としての顔を持つに到る。

図 1-2　南堀江一丁目　立花通り

図 1-3　湊町方面から南堀江一丁目、二丁目方面を望む

(4)堀江の範囲と地域名称

住所表記としての堀江は、北は旧長堀川にあたる長堀通を隔て西区新町、西は木津川を隔て西区千代崎、南は道頓堀川を隔て浪速区幸町、東は阪神高速一号線を隔て中央区西心斎橋と境を接する範囲であり、旧堀江川にあたる周防町通を以て、北堀江、南堀江を分かつ。

町名表記としての「堀江」以外に「堀江」とされている範囲については確認ができていない。堀江小学校校区には新町、堀江中学校校区には西区千代崎、本田、浪速区幸町が含まれるが、これらの地域を「堀江」と称することはない。

一方で、堀江地区内で「堀江」以外の地域名称を使用する例は多く存在する。

北堀江一丁目四ツ橋交差点辺りを漠然と「四ツ橋」と呼称する場合や、南北堀江ともに一丁目ではマンション名等に「西心斎橋」の名称を使用する場合がある他、旧町名の「西長堀」は地下鉄千日前線及び長堀鶴見緑地線の駅名となっていることからも、比較的用いられる場合が多く、同じく旧町名の「西道頓堀」もマンション名に使用されている。長堀鶴見緑地線開通後は、西長堀駅と心斎橋駅の間に西大橋駅が開業したことから、長堀川となにわ筋の交差点に架橋されていた橋名にちなむ交差点名の「西大橋」も使用されることが増加した。

(4)堀江の交通機関

公共交通機関は、大阪市営地下鉄四つ橋線四ツ橋駅（北堀江一丁目）、同長堀鶴見緑地線西大橋駅（北堀江一・二丁目）、同長堀鶴見緑地線・同千日前線西長堀駅（北堀江三・四丁目）の他、市バス多数。また、長堀鶴見緑地線・阪神なんば線ドーム前千代崎駅、JR 難波駅、千日前線及び阪神なんば線桜川駅、JR 大正駅、南海汐見橋線汐見橋駅等を最寄駅とする地点もそれぞれ存在する。ただし、堀江地区内に存在する駅は何れも地下鉄駅であるのに加えて、堀江が街として成立したのが公共交通機関発生以前であることからも、駅を中心として街を捉えることはできない。

(5)堀江の隣接地域

阪神高速を隔てた東側のアメリカ村はブティック等が立ち並ぶ所謂若者の街であり、その先の心斎橋は大阪を代表する繁華街の一つである。近年堀江のファッション・カフェ街化にともなって、心斎橋、アメリカ村と堀江が連続する街として捉えられる場合がある。

道頓堀川を隔てた南側の湊町は旧国鉄湊町駅現 JR 難波駅があり、難波の繁華街にほど近い。

木津川を挟んで西側は、千代崎に京セラドーム大阪、九条商店街（ナインモール）、旧赤線地区の「料亭」街松島新地を擁する松島に隣接している。殊に九条は西に川口居留地と隣接し、明治以来鉄鋼業を中心に大阪を代表する工業地域として発展し、九条商店街は「西の心斎橋」の異名をとった。

長堀通を隔てた新町は徳川時代に京島原、江戸吉原と並び称される日本三大遊郭の一つとして栄えたが、今日ではオフィス街となっている。

図 1-4　アメリカ村　周防町通三角公園

図 1-5 四ツ橋筋より湊町方面を望む

図 1-6　木津川　左側：南堀江四丁目　右側：千代崎

第２章　堀江の地理及歴史的環境

(1)古代から近世までの大阪

本稿に於いては、堀江新地が開発される以前の大阪について、主に昭和4年出版『南北堀江誌』の記載に基づき簡略に述べる。

後述する様に豊臣時代に城下町として開発された大坂は、それ以前に存在した難波の地との間に連続性を欠いている。しかし、古来難波が大陸及び半島に対して開かれた海港としての地位を担った点は、正に大阪市章に澪標が採用されている如く、現在に継承されている「水都大阪」像の原型を為すものであり、堀川の開削によって開発された堀江地域を論じる上で、無視し得ない。加えて、堀江の地名は古代の故事に由来する。また、豊臣時代以降の城下町大坂の開発は、徳川時代に堀江が開発されるに到る前提を形成したため、これも特に述べる。

但し本論文の主題は近代以降、特に平成年代以降における堀江地区の変化であることから、簡述するに止める。

古代から中世の大阪

大阪の起源

大阪は早くも日本書紀神武天皇の条に登場し、「難波津」或いは「難波」と称された。記録の中で初めて登場するのは古事記応神天皇の段であり、船着場として描かれている。近年水都大阪を巡る言説が多く見られるが、その原型はこの時点で既に存在していたと考えられる。

上古の昔、上町台地は北へ突き出る半島であり、西側の船場方面は大江の岸と称された大きな入江、東側は広大な河内湾であった。「大阪」の地名の由来は諸説あるが、その中の一つに「大江坂」の「江」を豊太閤が削り「大坂」と名付けたとの説もある。

大江の岸は年次を経るにつれて淀川や大和川から流し出す土砂により埋もれ洲を成し、「八十島」と称されるようになった。次第に「八十島」は葦が生い茂り、船の航行を妨げるようになったため、澪標を立てて航路を指示、この「みおつくし」が現在の大阪市章になった。

日本の伝統都市を「都城」と「城下町」に類別した場合[1]、大阪には 7 世紀から 8 世紀に本邦初の都城である高津宮が存在し、豊臣秀吉による大坂城とあわせて、大阪には両方が存在したことになる。

仁徳天皇即位元年に高津宮が奠都されたが、第二次世界大戦後の発掘調査までその正確な位置が明らかですらなく、現在の大阪との関連性は薄い。

難波は後に続く飛鳥京時代以降、朝鮮半島との交通が盛んになるにつれ繁栄の度を増し、直接隋唐との往来が始まるに至っては、その殷賑は極に達した。しかし平安京遷都後、海上交通は今日の大阪市と尼崎市の境界に位置する神崎川の流路に依り、難波津はたちまち衰退して、仁明天皇の承和 11 年には鴻臚館も廃止されるに至っては、天王寺、住吉方面の寺社仏閣周辺に繁栄の名残を留めるのみとなり、さらには鎌倉末期から南北朝の戦乱によって、全くの荒地となった。

難波の地が再び歴史上に登場するのは、石山本願寺の出現を待たねばならない。明応五年本願寺蓮如が東成郡生玉の庄内石山に別院を設け、天文元年山科を追われた証如が祖像を奉じてこの別院に入り、石山本願寺門前町の繁栄を現出したが、織田信長の攻撃を受け天正 8 年に正親町天皇の勅命により開城、その際に火を発して 49 年間の繁栄も烏有に帰した。天正 10 年本能寺の変後、池田信輝が一時石山城に拠ったが、目覚しい開発は行われなかった[2]。

---

1 「ぐるーぷ・とらっど」の提起による

2 『南北堀江誌』P.1~4

豊臣時代から徳川時代にかけての大阪

城下町大阪の形成

現在の大阪の起源は 16 世紀末、豊臣秀吉による城下町大坂の建設に求められる。

天正 11 年、豊臣秀吉が天下に号令し三十余国の人夫を動員、絢爛たる巨城を建設するとともに、城下町の建設を企画した。

豊臣秀吉による城下町大坂建設計画は当初上町台地上に限られ、中世末までに寺社を中心に都市として形成されていた四天王寺を経て天王寺に至り、後には国際貿易港堺へと延びる線状の都市が構想されていたが、慶長元年の大地震によって堺港の機能が損なわれたことによって頓挫した。その後慶長 3 年の大坂城三ノ丸建設を契機とし、西側の船場方面への広がりを見せたことで、大坂城下町は面状に成立することとなったのである[3]。

中世末期の船場方面は前述の如く海でこそないが水はけの悪い湿地帯であり、堀を掘り水はけをよくするとともに、その土を以て土地を造成する手法により開発された。

なお慶長 3 年の開発によって、土佐堀川、東横堀川、長堀川、西横堀川に囲まれた区画たる船場の範囲が確定、道修町や平野町には富裕な町人が居住し、屋敷地内に礎石建物や蔵屋敷が立ち並んだ[4]。

一連の開発により大坂は大城下町として発展し、また、堀を掘っての開発は、その後昭和 30 年代まで大阪が水運により栄える基礎を築いた。

豊臣秀吉によって建設された大坂は慶長十四年から十五年にかけての大坂の陣により消失したものの、その開発基盤は徳川時代に継承される。

元和 5 年には天領即ち幕府直轄地となり、二代将軍徳川秀忠の命によって寛永 6 年までに大坂城の再建と大坂市街地復興及び拡張が行われ、市街地は西船場まで拡大、大坂三郷がほぼ完成する。

大坂三郷

大坂三郷とは北組、南組、天満組より成る行政区分であり、明治以降も大正期に「大大阪市」として拡張されるまでの間大阪市の範囲として継承された。各々有力商人から選ばれる惣年寄以下の役職がおかれ、惣会所にて執務した。原則として天満組は大川（江戸時代はこれが淀川本流）以北、それ以外の地域は本町通りあたりを境界として北組と南組に分けられ、大阪三郷はほぼ空間的な区分といえるが、例外は以下三か所である。

穢多身分の集住する渡辺村は三郷の南、木津村領内であったが、豊臣時代の大坂建設以前は天満の地にあったとの由来から、天満組に属した。

---

[3]塚田孝・吉田伸之編『近世大坂の都市空間と社会構造』P.5
[4]塚田孝・吉田伸之編『近世大坂の都市空間と社会構造』P.22

大坂唯一の幕府公認遊郭であり、三大遊郭としてその名を誇った新町は、空間的には南組の中であるが、北組と南組それぞれに分けられている。

本論文の調査対象地である堀江も例外の一つである。元禄 11 年に堀江川が開削され新地として開発された堀江三十三町は、当初北組・南組の加郷とされたが、元禄 16 年に北組・南組・天満組に分割された[5]。

[5] 『歴史の中の大坂』P.102~104

(2)　中世から戦中にかけての堀江

徳川時代の堀江新地開発後発生した産業は、その後明治、大正、昭和と数多くの節目を迎えつつも、概ね戦後まで継続して存在し続ける。本稿でも『南北堀江誌』を主な史料として用いた。

堀江新地開発までの堀江

堀川開削の都度沿岸を開発

堀江の地名は仁徳天皇が開いたとされる難波堀江に由来し、北堀江に所在する和光寺境内阿弥陀池もまた物部氏が阿弥陀如来像をその難波堀江に捨てたとの故事に由来するが、難波堀江と現在の堀江は別の場所とされている。

空間座標としての堀江の地が、初めて歴史の舞台として登場するのは、石山合戦の穢多ヶ崎城まで待たねばならない。先述したように中世時期から近世時期、船場以西の地域は葦生い茂る砂地であり、所々に漁労を営む人家ができた程度であった。穢多ヶ崎の正確な地点は不明であるが、南木津川の沿岸近辺であることは確実視されている。

豊臣時代に入ってからの慶長年間、西横堀川開削に伴い横堀呉服町が西横堀川沿いに、徳川時代寛永二年の長堀川開削によって宗無町、次郎兵衛町、新兵衛町、白髪山両裏櫂屋町が開かれ、南北堀江西岸には船着き場として下博労町が発展した。これに続いて慶安元年、下博労町東側に玉造口定番与力同心増員のため、その邸宅用地を接収した際に立ち退いた八カ町住民が代地を賜って移り住んだことにより、新玉造八町を形成した。このようにして、堀江は徳川初期までにその地域をある程度明確にし、堀江新地開発まで漸次発展を続ける[6]。

堀江新地時代

堀江川開削による新地開発

先述のごとく大阪堀江は 17 世紀末の元禄 11 年、官命を受けた河村瑞賢によって長堀川と道頓堀川の間に開削された堀江川を中心に大坂三郷で最も新しい新地として開発された。従前は上下難波領に属したが堀江川開削が成って「難波地向後堀江町と改之事」との触れが発せられ、ここにおいて初めて「堀江町」と命名される。

堀江川は長さ 12 町 5 間 5 尺、幅 30 間、河道に当たった町はそれぞれ代地を新地の中に賜り、南北堀江、御池通、橘通、幸町（道頓堀川南側　現在の浪速区幸町）の 29 カ町が新たに成り、これを堀江新地の開発と称す。

399 軒が新地の配分を受け、地代金は 10 カ年賦に上納すべしと定められた。新地の街並みが出来ると奉行は新地振興策として、これに茶屋 68 株、煮売家 31 株、水茶屋 31 株、湯

---

6 『南北堀江誌』P.10

屋 3 株、髪結床 26 株、道者宿 141 株等を許したほか、芝居 3 座、能舞台 3 か所、勧進相撲、夜店市、青物市場、生魚市場、油市場等の設立、上荷船 500 艘、新土船 24 艘の建造を許可した。

南北二郷の加郷から三郷に分属となったのちも繁華に向かったが、享保 9 年 3 月の大火で北半が灰燼となす災禍を被った。

明和元年には堀江川両岸の埋め立てが命じられ、在来の各町に加えて茶屋 50 株、煮売家 50 株、湯屋 2 株を許した。寛政三年、堀江は再度大火に見舞われるが、迅速に復興された[7]。

花街と家具屋街の登場

堀江新地開発とともに茶屋株、煮売屋、水茶屋、道者宿株がそれぞれ許され、さらに阿弥陀池畔に蓮池山知善院和光寺が建立されたことによって、堀江は参詣遊山の人々で賑わい、それは同時に遊里としての発展を意味した。堀江における遊里の起源は不明であるが新地開発以前に遡られることは確かであり、一説によると寛文年間新町廓に遊ぶ客の中で大夫末社を従えての阿弥陀池散策が流行し、その休憩に寄ったために茶屋が繁盛したのが初めとされる。また、文献中最も古いものでは、下博労町の桔梗風呂である[8]。

寛永二年刊『傾城武道桜』に堀江遊里の繁昌振りが示されているが[9]、何分官許を得ていない廓のため、公の干渉によって新町に押されがちであり、名望家が有力幕吏に茶屋で女を抱えられるように出願して却下された他、奢侈禁止令に対抗して南堀江の相撲客を迎えるために橋を架け、極端な廉価主義で売るなど、そのいたちごっこは維新まで続けられた。

以上遊興地としての堀江について述べたが、四辺環水にして舟運の便、廻船の利に恵まれた堀江新地は当然の結果として諸藩蔵屋敷が置かれ、また水運利便なることは諸国廻船問屋、北国問屋他、材木、新炭、藍、砂糖、銅吹、酒造等商工業の発展を促し、また橘通には仏壇、箪笥その他道具商が立ち並び、道具屋筋の異名をとり、出船千艘入船千艘の殷賑を誇り、大坂の繁栄と不可分の経済的地位を築いた。江戸廻船と北国廻船の発着地が堀江であったことからも、往事の繁栄がうかがえる[10]。

和光寺門前市として仏具屋と家具屋が集積した橘通は、後に「立花通」と漢字表記が改められるが、平成に到るまで「家具の街」として脈々と継続することとなる。

---

7 『南北堀江誌』P.10~11
8 『南北堀江誌』P.719
9 『南北堀江誌』P.720
10 『南北堀江誌』P.719~726

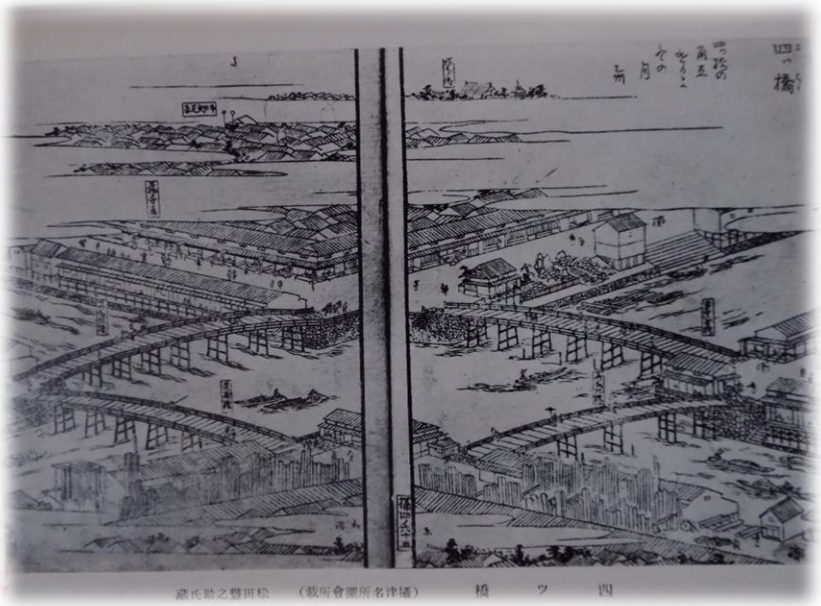


図 2-1　江戸時代の四ツ橋（『南北堀江誌』より）

江戸時代の堀江新地を総括するに、天下の台所大坂の一大商工業地域であると同時に、天満組・北組・南組の混在地域であり遊興業が栄えたことからも見られる如く、大坂三郷の中でも周縁部的位置づけの一種猥雑性を含んだ地域であったと考えられる。

(3)　明治年間

行政区分変化

明治 2 年 5 月、大坂三郷が廃止となり新たに東西南北の大阪四大組に改組されたことによって、堀江は西大組に編入された。その後明治 8 年 8 月に改められた第三大区を経て、明治 12 年 2 月に大小区が廃止され西区に編入、三分画に分属したのち、明治 14 年 8 月に分画を改め聯合と称され、学区、町内会等の行政上区分である堀江連合、[11]日吉連合、高台連合として今日に至っている[12]。

堀江遊郭許可

堀江の遊里は、明治元年に一般の茶屋は新設の松島遊郭へなるべく移るようにとの内達があり恐慌を来たしたが、やがて立ち消えになり、明治四年には北堀江上通二丁目、同下通二丁目宇和島橋筋東の辻から、同上通三丁目、同下通三丁目、問屋橋筋までの地域を堀江遊郭として公然許可され、従来の飯盛女・飯焚女は芸妓・娼妓に呼び改められた。

明治 5 年 11 月 29 日太政官布達により人身売買が禁止されたことで堀江遊郭は一時衰退するが、二、三年で旧に復し、また茶屋の娘は勿論芸娼妓全体に教育を施し、英語数学裁縫国語を習得した堀江の芸妓は大阪における遊郭中一番品位があると評判を高め、西南の役後は名士の来遊多く俄然盛況を呈した。堀江遊郭はその後明治 14 年の大火、明治二十五年芸妓は必ず遊郭区域内に住居の事が定められ、地域の年中行事に芸妓が参加するようになる等の変化を見せる[13]。

図 2-2　堀江遊郭芸妓による八乙女（南北堀江誌）

---

12 『南北堀江誌』P.254~265
13 『南北堀江誌』P.726

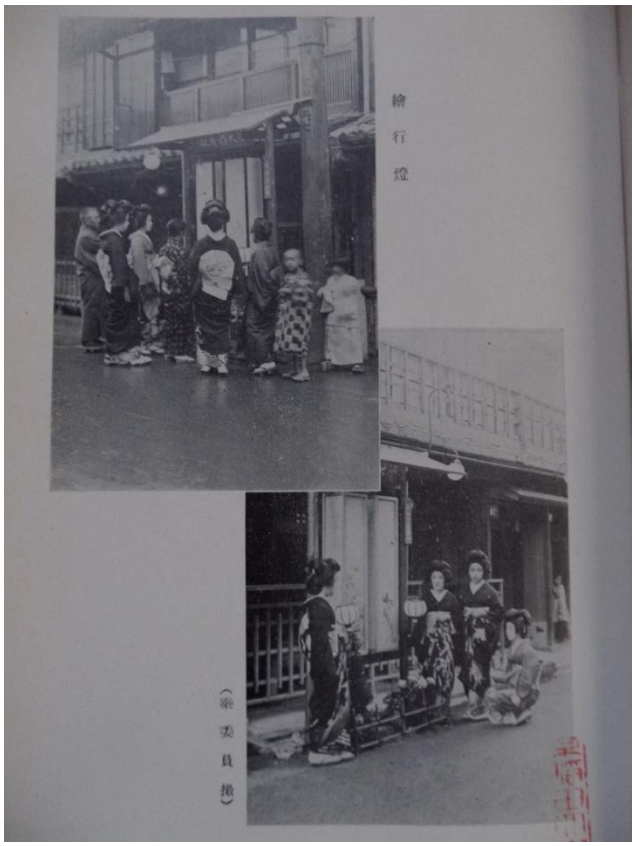


図 2-3　絵行灯（『南北堀江誌』より）

商制度と産業発達による変化

続いて商業上の変化について述べれば、明治元年の御一新により仲間法則が崩壊、新規開業者続出し一時混乱を見せるも、各業種で旧来の習慣に拠った形式で仲買組合規則を立てた一方、取扱商品は近代工業化の影響により変遷する。

藍屋から例を引けば、明治 6 年 12 月に藍商仲買組合規則を立て、大阪府の許可を得て新規参入に制限を加え、明治 13 年 3 月、商法会議所決議を経て藍商仲買規則を修正、明治 14 年 10 月大阪府第 222 号布達を以て新たに仲間規則を編成､取り締まりを置いて総轄させた。株仲間廃止以前の同業者が「永続組」と称する一派を形成、新規開業者の加入を極力排除したため、明治十九年頃には新規同業者が「共盛会」を組織、両派が対峙するようになった。明治三十三年三月、重要物産同業組合法の発布を受け、永続組と共盛会が争って創立発起を申請、大阪府の訓諭に従って各会を解散、明治 34 年八月和光寺にて同業組合創立組合総会を開くも、久しく続いた感情のもつれによって成立せず、永続組は再度藍商同盟永続組を興した。

一方取引商品である藍は、明治 28 年頃ドイツにて人造藍が発明され、日露戦役後内地藍の不作と暴騰に乗じて人造藍は勢力を拡大、藍商は長年取り扱ってきた愛着から内地藍と印度藍の混合で対抗するも、価格上の問題から内地藍と人造藍の混合が増え、人造藍が天

然藍を圧迫するようになる。その後明治 43 年頃から硫化染料の輸入が始まるなど、時勢の移り変わりによって、藍商は染料商となり、藍屋の出障子はドラム缶へと変わっていった[14]。

この他の代表的な取扱商品の変化としては、橘通の箪笥屋が洋箪笥の取り扱いを開始したほか、紡績産業の誕生にともない綿商が興り、木津川対岸の松島から南堀江西側から北堀江にかけて集中、その後松島の綿屋は閉店し、堀江が中心となった[15]。

維新後衰退した代表的産業は廻船問屋である。明治初年までは徳川時代以来の全盛を保ち明治二十年頃には依然として北国廻船数 650 艘を有していたが、交通機関の変遷によって、明治 41 年を最後にその姿を消した[16]。なお、銅吹屋は慶応年間の銅高実地調査によって一軒残らず絶滅した[17]。

明治維新を迎えたのちも、堀江地区は遊里を持つ大阪中心部の商工業地域として位置づけられ、その地位は徳川時代から何らの変化も見られない。ただしその中で、新旧業者の対立、取扱商品の変化など、近代商工業都市大阪が発展していく中で受けた影響は見るべき点がある時期と評価しなければならない。

---

14 『南北堀江誌』P.57~63
15 『南北堀江誌』P.139
16 『南北堀江誌』P.48~56
17 『南北堀江誌』P.132

(4)　大正年間から戦災

①　大大阪時代の発展と衰退

日清・日露二回の戦役は紡績業をはじめとした大阪の工業を大きく発展させ、大阪は東洋のマンチェスターと称されるに至り、堀江地区を日本第一の綿屋の本場[18]として押し上げた。

『西区制１００年のあゆみ』において、大阪市西区人口増減最初の節目として、大正 14 年「大大阪市」成立にともなう分増区制が挙げられている。分増区制により、西区西部地域の一部が大阪市港区に編入されたことによって、図 2-3 に示す如く西区の人口は 37 万 9983 人から 13 万 0146 人に激減する。同時期に堀江地区自体の人口も 5%ほど減少しているが、大きな変動期とするには足りない。

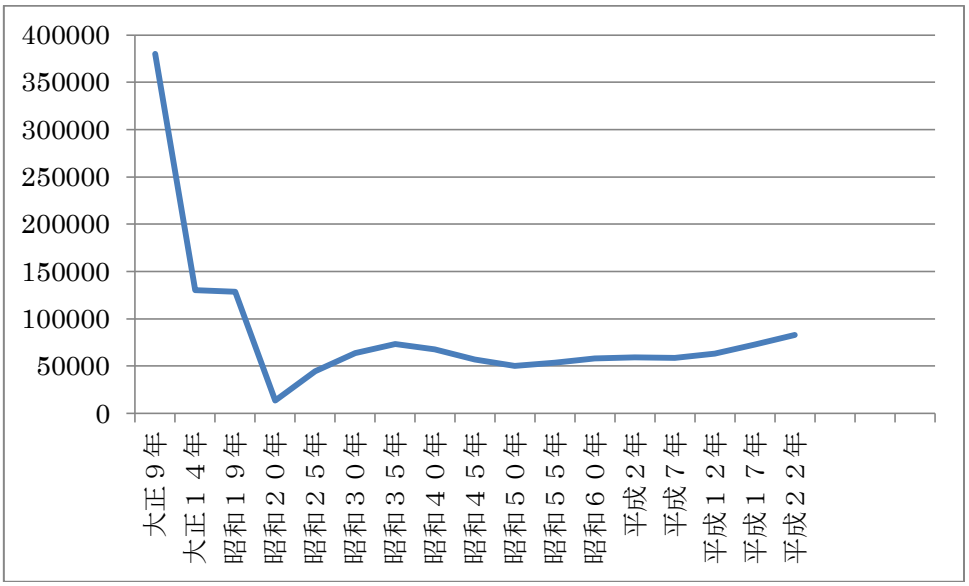


図 2-4　西区人口推移（大大阪市以前から平成二十二年）[19]

[18]『南北堀江誌』P.140

[19] 平成二十二年国勢調査、『西区制１００年のあゆみ』をもとに作成

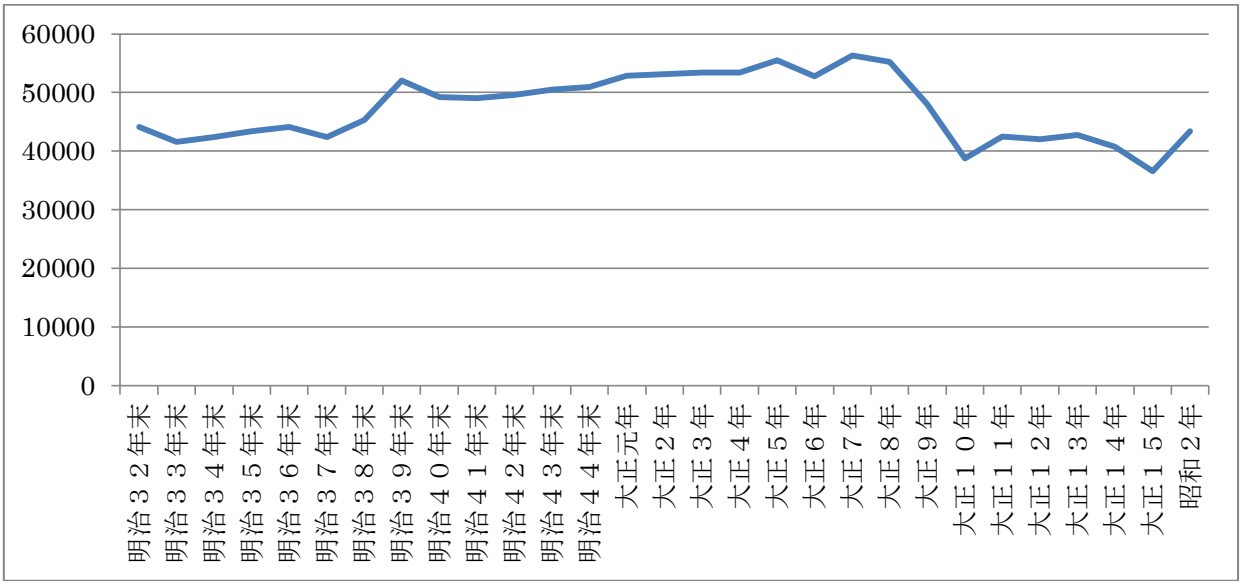


図 2-5　堀江人口推移１[20]

図 2-4 に示されているとおり堀江の人口にとって重要な転機は、明治 34 年の 4 万 2,359 人から日露戦役を経て微増基調にあった人口が、大正 8 年の 5 万 5,270 人をピークに、翌 9 年 4 万 8,001 人、 翌々10 年には 3 万 8,755 人と、大幅な減少を記録している大正九年である。

同時期、大阪市の人口も大正 8 年の 158 万 3,650 人から大正 9 年には 125 万 1,972 へと激減しており、第一次大戦の戦後反動恐慌による影響が第一に考えられる。特に堀江の綿屋は、大正 9 年 4 月の増田ビルブローカー銀行支払い停止記事を導火線にしての紡績織物大暴落により破産者が続出し、恐慌状態を惹き起こした[21]。

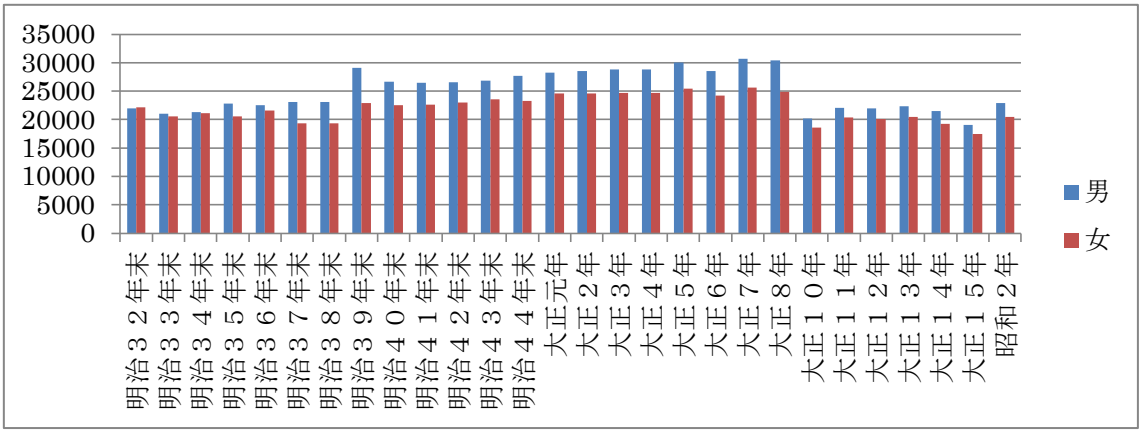


図 2-6　堀江男女別人口推移[22]

20 『南北堀江誌』より作成
21 『南北堀江誌』p.143
22 『南北堀江誌』をもとに作成

戦後反動恐慌による影響は人口男女比と戸数増減からも読み取ることが可能である。図2-5にあるように、明治35年から堀江の人口は女子人口に比して男子人口が不均衡に多い状況が続いたが、大正10年には男女比の差が縮小している。また、図２にあるように戸数は大正３年の10394戸をピークにその後減少を続けているのにも関わらず、人口は増加を続けている。また、人口が前年に比して9,000人以上減少した大正10年、戸数はむしろ増加している。以上から考察するに、大正９年から10年にかけての人口激減は、大戦景気の中、下宿人が戸数減少分を補うに余りある量流入することによって人口を押し上げ続けていたものの、戦後反動恐慌によって減少に転じたことによると考えられる。

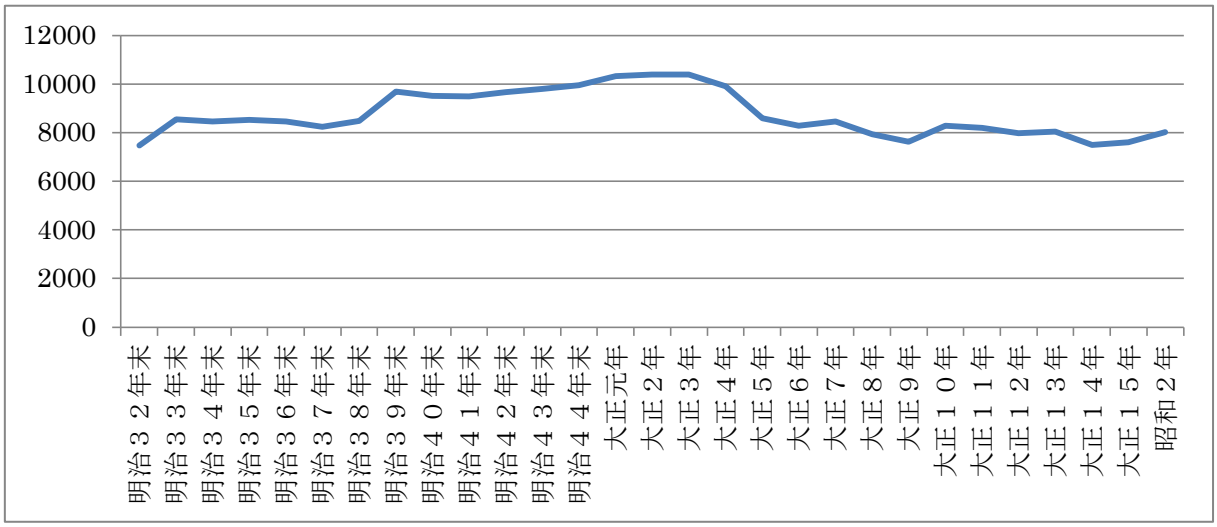


図2-7　堀江戸数推移[23]

②都市問題による住民入れ替わり

戸数減少と人口がその後回復しなかったことを合わせて考えるに、大阪が急速に発展する中で激化した都市問題も無視しえない。堀江はその面積僅か約２平方キロメートルほどであり、況してや高層集合住宅もない時代、その猫の額のような地面の上に五万人以上が生活をしている状況は、常軌を逸した過密と言わねばならない。大正八年三月十七日の『大阪朝日新聞』は当時の大阪における都市問題について以下のように表現している。

過群生活は不足生活である・・・・・・まず土地の不足を感じ、家屋の不足を感じ、屋内にありては新鮮なる空気と日光の不足を感じ、上水道の不足を感じ下水道の不足を感じ、街路に出でては運輸系統、街路系統乃至路面舗装の不足を感じ、公園遊技場の不足を感じ、電車の不足を感じ、市民の幸福と利便とは日々に減殺さるゝ代わりに、不安と危険と不自由と不経済とは日々に増大していくのは過群生活の最も憂ふべく恐るべき害毒である。

[23] 『南北堀江誌』より作成

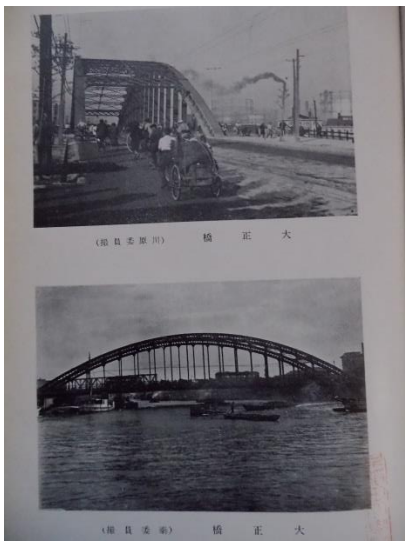
過密状態は疫病を惹き起こし、堀江地区もまた、明治年間からコレラ、ペスト、流行性感冒が度々流行したのは言うに及ばず、ことに大正 9 年 1 月には流行性感冒が猖獗し、堀江・日吉両小学校では在籍児童中 1 割以上の罹病者を出し十日間の臨時休校となり、大阪市全体で 5,600 人余りが死亡、西区内では 1,000 人に 4 人が死亡した[24]。

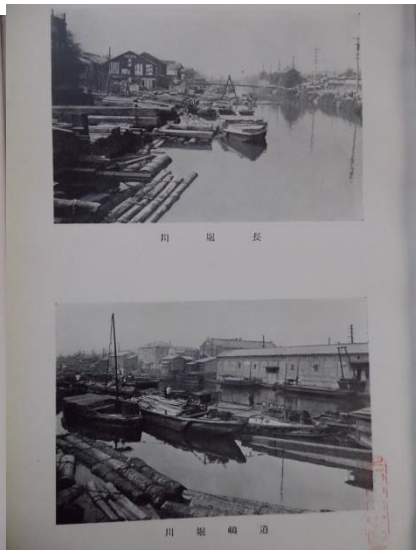
またこの時期は、明治 40 年代からの阪神、阪急等私鉄による郊外住宅地開発がすすめられている時期とも重なっており、この時期堀江地区から多くの商家が環境劣悪となった中心部を嫌い、職住を分離して郊外へ転居し、徳川時代以来の堀江地区住民構成に大きな変動をもたらしたと考えられる。

[24] 『南北堀江誌』P567~598

図 2-8　昭和初期の堀江

現南堀江三丁目から二丁目・一丁目方面を望む（南北堀江誌より転載）





（左）図 2-9　昭和初期の大正橋　（『南北堀江誌』より）

（右）図 2-10　昭和初期の長堀川（上）と道頓堀川（下）（『南北堀江誌』より）

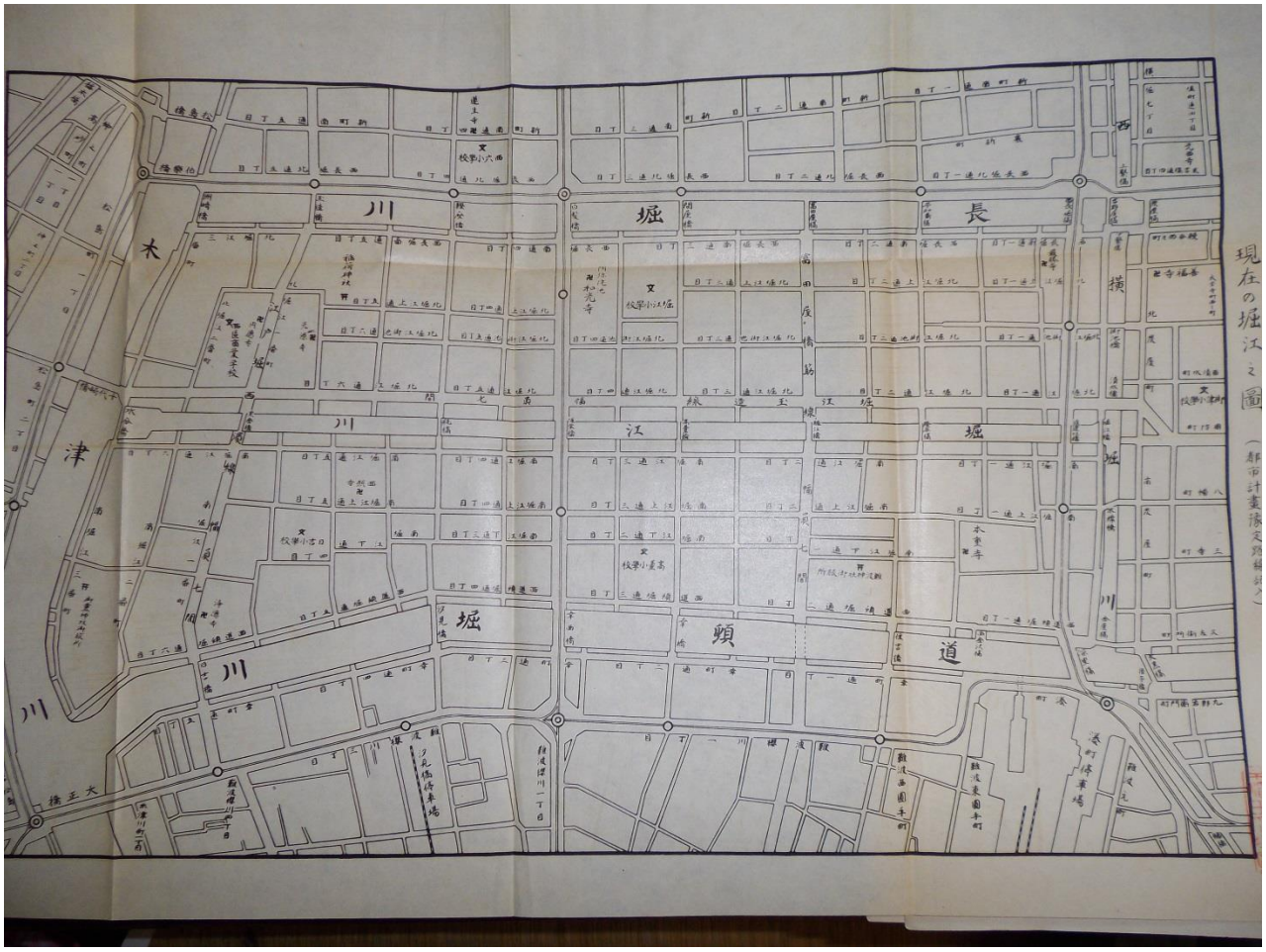


図 2-11　昭和四年堀江地図（『南北堀江誌』より転載）

図 2-12　昭和初期の堀江　西側を望む（南北堀江誌』より転載）

戦災による焼失

西区史が指摘している二回目の変動は戦災である。特定非営利活動法人なにわ堀江１５００により作成された昭和 15 年の住宅地図によれば、北堀江上通一丁目から三丁目と北堀江御池通一丁目から三丁目まで、即ち現北堀江一丁目から二丁目に花街関係（貸座敷・検番・宿屋・ホテル）集積すること 120 軒を数え、また南堀江上通一丁目から四丁目、現南堀江一丁目から三丁目の立花通りに家具屋（和洋家具・建具・仏壇・表具）130 軒が立ち並び、堀江の二大産業を成している。また、長堀川沿いの西長堀南通一丁目から四丁目（現北堀江一丁目から三丁目）には材木関係業者が集中、道頓堀川沿いの西道頓堀の業者とあわせて 80 軒を有し、木津川沿い（現南北堀江四丁目）の運輸・倉庫（海運・船具・運輸・倉庫）と並んで、これも堀江の主要産業に数えられる。

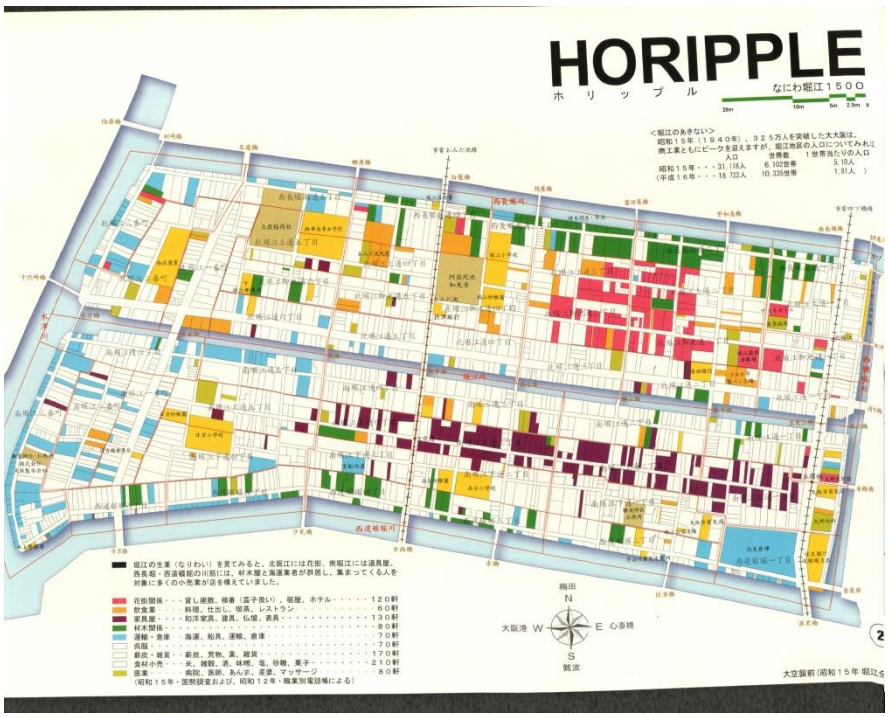


図 2-13　昭和 15 年住宅地図（『堀江戦前住宅地図』より転載）

住宅地図と写真を見るに、多くの建物は住宅兼店舗であり、店舗と住宅が相当に過密した、天下の台所大阪の繁栄を継承する街であったと見られる。

昭和 19 年時点西区は 12 万 8432 人の人口を擁したが、空襲を予想して疎開した者 2 万 0,599 人、さらに空襲による罹災者８万７１４３人、昭和二十年三月十四日の大阪大空襲までの期間において、実に西区民の 79%が罹災し、死者 766 人、重軽症者 391 人を数えたことによって、昭和 20 年の人口調査では昭和十九年の 10．4%に過ぎない 1 万 3,349 人まで激減した。

なお、東京大空襲と比較すれば罹災人数に対する死傷者が少ないのは、東京大空襲が住宅密集地域を炎によって包囲し、然る後に包囲対象地域へと焼夷弾による空襲を行ったのに対して、大阪大空襲は大阪市の西から、まず大阪港築港、続いて九条方面の工業地域、さらに堀江の属する中心市街地と、西から東へと順繰りに爆撃を加えられたことによる。

以下、『西区制１００年のあゆみ』と聞き取り調査をもとに、堀江地区と周辺の空襲及びその被害状況について述べる。

3 月 13 日午後 10 時 20 分に警戒警報が、続いて午後 11 時前に空襲警報が発令され、間も無く大阪市港区築港への米軍による爆撃が開始されるも、堀江地区においては僅かに遠くから焼夷弾の落下音が聞こえるのみであり、危機感は強くなかった。続いて九条・松島方面が猛火に包まれ、木津川対岸の堀江地区へ避難民が押し寄せるに到り、多くの住民はようやく一大事と気づくも、時を置かずして堀江地区への焼夷弾投下が開始された。

この 4 日前に東京江東地区が空襲により壊滅的被害を受けた際の戦訓は未だ大阪方面に伝えられておらず、焼夷弾は着弾とともに発火することを想定して防火訓練をしていた住民は、牡丹雪の如く火の玉となって落下してくる焼夷弾を前にして為す術もなかった。また、前年大阪天満に投下された 1 屯爆弾による爆風の脅威を受けて空襲時の防空壕への退避が促されたことは、却って防空壕内での焼死を招いた。

西道頓堀一丁目（現南堀江一丁目）の住友倉庫に避難した、御堂筋の大丸心斎橋店とそごう心斎橋本店の間の街路に身を寄せた、或いは近年 NHK 連続ドラマ小説「ごちそうさん」で描写されたように[25]地下鉄御堂筋線心斎橋駅構内に駆け込み避難列車で梅田に逃れたとの証言がある一方で、満潮により水位の上昇した堀川へ飛び込んだ者に多くの溺死者を出した他、空襲の翌日母の遺体を猛火に包まれた阿弥陀池にて金歯の位置を頼りに焼死体の中から探し出した、防空壕での一家全滅が見られた等の証言がある。

空襲の数日後堀江小学校雨天体操場に 157 体の遺体が運び込まれたが、多くは引き取る者なく、和光寺内墓地に埋葬された。

---

25 「ごちそうさん」の舞台となった天満が空襲を受けたのは昭和 20 年 6 月 1 日の第二回大阪大空襲であり、また天満は旧淀川以北に位置し心斎橋よりもむしろ避難列車の目的地である梅田に近い。劇中ヒロインが 3 月 14 日の大空襲の際、空襲を受けた自宅から心斎橋駅へ逃げ込み、そこから梅田駅へと避難列車に乗ったとする「ごちそうさん」の描写は地理的にも時間的にも全くおかしい。東京で言えば、浅草に住んでいる人間が 1 月 27 日の銀座・有楽町方面への空襲で、爆撃を受けた自宅から銀座駅へ駆け込み上野駅へと逃れたと言っているようなものである。

3 月 14 日に堀江地区は学校、大野病院、住友銀行、住友倉庫といった鉄筋コンクリート建築の他、赤煉瓦倉庫や土蔵を残して全域を消失し、徳川時代における堀江新地開発以降の連続性は寸断されることとなった。

図 2-14
写真中央を上下に貫く大通りが御堂筋、やや右寄りの大きな建造物手前側が大丸心斎橋店、奥がそごう心斎橋本店。中央左側の川が西横堀川、それと交差する左右に流れる川が長堀川。即ち左側中央が堀江地区。一見して、木造建築物が全滅したとわかる。

(5)戦後から現在

①交通網の変化

戦後最大の変化は、堀川埋め立てと大通りの整備である。

北側の新町地区との間を流れる長堀川は、昭和 35 年より四ツ橋以東（通称東長堀川）の埋め立てが開始され、昭和 42 年に四ツ橋以西の西長堀川埋め立てが始まり、昭和 46 年に終了、末吉橋通を拡幅する形で片側４車線の長堀通（大阪府道 173 号大阪八尾線）が開通した。

図 2-15　左：長堀通四ツ橋交差点　新町方面を望む

図 2-16　右：四ツ橋交差点に遺る四ツ橋記念碑

また堀江を南北に分かつ堀江川は昭和 35 年に埋め立てられ片側一車線の道路が開通、東側で接続している島之内心斎橋方面での呼び名に倣い「周防町通」と通称される。平成 22 年、堀江連合振興町会会長の大阪市への嘆願により、堀江公園内に堀江川跡碑が設置された。

図 2-17　左：周防町通

図 2-18　右：堀江公園内の堀江川跡碑

東側の島之内心斎橋地区との境界である西横堀川は昭和 37 年に埋め立てられ、その上に阪神高速一号環状線が開通した。

写真は現在の道頓堀と旧西横堀川の交差点であるが、近年大阪では府と民間団体が共同して水都大阪復興に取り組んでおり、その一環として川沿いの遊歩道整備が推進されている。

2-19　左：旧横堀川の上を走る阪神高速一号線　奥に所謂道頓堀界隈のネオンが見える

2-20　右：なにわ筋　街路樹は銀杏

堀川が埋め立てられ自動車交通網が取って代わったのに加えて、戦災復興土地整理事業によって南北に 2 本の幹線道路が整備された。富田屋橋筋から賑江橋筋東側に片側 3 車線のなにわ筋（大阪府道 41 号大阪伊丹線）、旧来の鰹座橋筋から瓶橋にかけては片側 4 車線の新なにわ筋（大阪府道 49 号大阪臨海線）が開通した。

図 2-21　左：旧電車道の阿弥陀池筋

図 2-22　右：新なにわ筋　周防町通りより北堀江、新町方面を望む

結果、戦前には四方を堀川に囲まれていた堀江地区は北を幹線道路、東を高速道路によって区切られ、戦前より市電の電車道であった四ツ橋筋、あみだ池筋になにわ筋と新なにわ筋を加えて堀江地区を 4 本の幹線道路が南北に貫く形になったのである。

旧川名或道路名	現在
西横堀川	阪神高速一号線
長堀川（西長堀川）末吉橋通（電車道）	長堀通、市電廃止
堀江川	周防町通（通称）
道頓堀川（西道頓堀川）	現存
木津川	現存
四ツ橋筋（電車道）	現存、市電廃止
阿弥陀池筋（電車道）	現存、市電廃止
概ね富田屋橋筋～賑江橋筋東側	なにわ筋（新設道路）
概ね鰹座橋筋～瓶橋筋	新なにわ筋（新設道路）

表 2-1　堀川の変遷及び幹線道路一覧

図 2-23　左：木津川　右側に見える弧を描く建物は大阪ドーム

図 2-24　右：道頓堀川 左側は湊町、右側は南堀江

続いて市内電車交通網の変化について述べる。

旧来、堀江地区内には戦前以来、大阪市電東西線、同南北線、同桜川中之島線、以上 3 本の市街電車が運行されていたが、現在に到るまでの間に全て地下鉄に置き換えられた。

東西線は長堀川に沿って末吉橋通を東の心斎橋方面から四ツ橋駅、なにわ筋の西大橋駅、あみだ池筋の白髪橋駅､西区役所前駅を経て西の松島方面へ至っていたが昭和 36 年に廃止。後は大阪市営バスが長く取って代わり、平成 9 年、長堀通に長堀鶴見緑地線が開通し、同線西長堀駅と西大橋駅が開業。

大阪駅前を起点とし、新町方面から四ツ橋筋を四つ橋駅、北堀江通一丁目駅と経て湊町駅前、難波駅前へ至る南北線は昭和 43 年に廃止され、翌昭和 44 年に地下鉄四つ橋線が開通、同年四つ橋駅が開業。

中之島の堂島大橋を起点として新町方面より阿弥陀池筋を白髪橋駅、あみだ池駅と経て西道頓堀の南側桜川二丁目を終点とする大阪市電桜川中之島は昭和 43 年に廃止され、昭和四十五年、新なにわ筋に千日前線が開通し西長堀駅が開業した。

市電路線名	地下鉄路線名
大阪市電東西線	大阪市営地下鉄長堀鶴見緑地線
大阪市電南北線	大阪市営地下鉄四つ橋線
大阪市電桜川中之島線	大阪市営地下鉄千日前線

表 2-2 市内電車の変遷

②戦後復興から衰退期

堀江地区の人口は戦前の昭和 15 年に 3 万 1118 人を数えたが、戦後 5 年過ぎた昭和 25 年には僅か 4,562 人まで減少しており、被害甚大であったことに加え、戦前の住人が堀江地区に戻ることがなかったことを表している。また、近年堀江国民小学校同窓会が開催された際、戦後に八割が地域外へ転出していたため、連絡に困難を極めたとの証言も得られている。

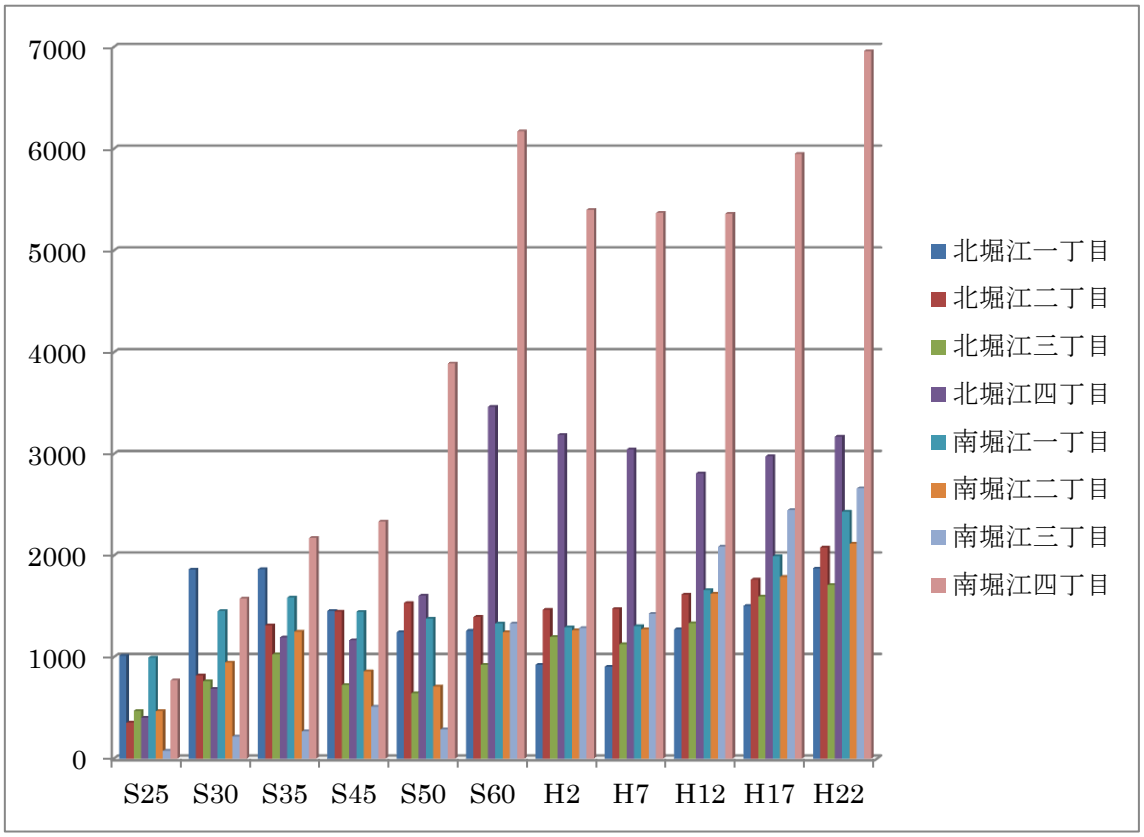


図 2-25　町丁目別人口変遷（国勢調査結果より筆者作成）

堀江地区の人口は昭和 30 年には 8,265 人、昭和 35 年には 10,681 人と急速に増加し、戦後復興の息吹を感じられるが、昭和 45 年には 9742 人と僅かながら減少に転じる。人口変遷を旧町名即ち東西の通り別に見れば、表の如くになる。南北堀江二丁目及び三丁目は比較的人口が一貫して少ないが、一丁目及び四丁目と比較して面積も狭いため、大きく注目すべき点とは言い難い。

但し、南北堀江ともに一丁目の人口が昭和 25 年から昭和 35 年にかけて最も早く回復した点は、より大阪都心に近い部分であり、かつ、花街や家具屋街を戦前から形成していたことから、比較的迅速な復興を達成したと評価出来る。昭和 35 年以降、南堀江四丁目の人口が突出しているが、これは西道頓堀コーポをはじめとして、大型マンションが開発されたことによる。

昭和 35 年から昭和 45 年にかけて、北堀江上通と立花通では人口が微増しているものの他は軒並み減少、特に北堀江御池通、南堀江通が大幅に減少している。

これらの町名別人口推移から、戦後すぐには戦前の姿を取り戻す方向で少しく復興が進んだが、堀川の埋め立てが開始されるのと同時期に衰退した。また、交通の自動車化によってそれまで堀江の繁栄を支えてきた水運は間もなく時代遅れとなって埋め立てられ、またその道路も渋滞することによって、事業者の郊外移転を促した。

堀江は徳川時代以来、水運至便な商工業地であり傾城の巷であるという二つの顔を持ち続けていたが、この時期に両方の顔を失い衰退期を迎えたのに加え、川の埋め立てと阪神高速道路一号線が西横堀川の上に開通したことによって、空間的連続性もまた急速に失われていく。

	昭和三十五年	昭和四十五年	十年前比
西長堀南通	987	897	0.908815
北堀江上通	879	1017	1.156997
北堀江御池通	1857	1423	0.76629
北堀江通	1679	1460	0.869565
南堀江通	1938	1528	0.788442
南堀江立花通	1758	1944	1.105802
南堀江大通	1187	1130	0.95198
西道頓堀	396	343	0.866162
合計	10681	9742	0.912087

表 2-3　衰退期の旧町名別人口比　国勢調査より筆者作成

	S25	S30	S35	S45	S50	S60
北堀江一丁目	1014	1864	1866	1456	1245	1260
北堀江二丁目	353	818	1314	1449	1534	1395
北堀江三丁目	471	765	1028	726	644	925
北堀江四丁目	404	689	1194	1166	1605	3466
南堀江一丁目	995	1454	1586	1447	1381	1332
南堀江二丁目	467	947	1251	861	711	1244
南堀江三丁目	77	218	268	512	290	1331
南堀江四丁目	770	1577	2174	2337	3892	6171

	H2	H7	H12	H17	H22
北堀江一丁目	925	907	1 274	1506	1874
北堀江二丁目	1467	1476	1 617	1764	2081
北堀江三丁目	1200	1128	1 335	1596	1711
北堀江四丁目	3188	3047	2 811	2978	3172
南堀江一丁目	1295	1306	1 659	1994	2434
南堀江二丁目	1264	1274	1 623	1791	2115
南堀江三丁目	1288	1427	2 088	2447	2663
南堀江四丁目	5402	5370	5 363	5951	6961

図 2-4　町丁目別人口変遷（国勢調査結果より筆者作成）

旧旧町丁目（S25・S30）	旧町丁目（S35・S45・S50）	現町丁目
西長堀南通一丁目	西長堀南通一丁目	北堀江一丁目
西長堀南通二丁目	西長堀南通二丁目	
北堀江上通一丁目	北堀江上通一丁目	
北堀江上通二丁目	北堀江上通二丁目	
北堀江御池通一丁目	北堀江御池通一丁目	
北堀江御池通二丁目	北堀江御池通二丁目	
北堀江通一丁目	北堀江通一丁目	
北堀江通二丁目	北堀江通二丁目	
西長堀南通三丁目	西長堀南通三丁目	北堀江二丁目
北堀江上通三丁目	北堀江上通三丁目	
北堀江御池通三丁目	北堀江御池通三丁目	
北堀江通三丁目	北堀江通三丁目	
西長堀南通四丁目	西長堀南通四丁目	北堀江三丁目
北堀江上通四丁目	北堀江御池通四丁目	
北堀江御池通四丁目	北堀江通四丁目	
北堀江御池通五丁目		
北堀江通四丁目		
北堀江通五丁目		
西長堀南通五丁目	西長堀南通五丁目	北堀江四丁目
北堀江御池通六丁目	西長堀南通六丁目	
北堀江通六丁目	北堀江御池通五丁目	
北堀江一番町	北堀江御池通六丁目	

北堀江二番町	北堀江通五丁目	
北堀江三番町	北堀江通六丁目	
南堀江通一丁目	南堀江通一丁目	南堀江一丁目
南堀江通二丁目	南堀江通二丁目	
南堀江上通一丁目	南堀江立花通一丁目	
南堀江上通二丁目	南堀江立花通二丁目	
南堀江下通一丁目	南堀江大通一丁目	
西道頓堀一丁目	南堀江大通二丁目	
西道頓堀二丁目	西道頓堀一丁目	
	西道頓堀二丁目	
南堀江通三丁目	南堀江通三丁目	南堀江二丁目
南堀江上通三丁目	南堀江立花通三丁目	
南堀江下通二丁目	南堀江大通三丁目	
西道頓堀三丁目	西道頓堀三丁目	
南堀江通四丁目	南堀江通四丁目	南堀江三丁目
南堀江上通四丁目	南堀江立花通四丁目	
南堀江下通三丁目	南堀江大通四丁目	
	西道頓堀四丁目	
南堀江通五丁目	南堀江通五丁目	南堀江四丁目
南堀江通六丁目	南堀江通六丁目	
南堀江上通四丁目	南堀江立花通五丁目	
南堀江上通五丁目	南堀江立花通六丁目	
南堀江下通四丁目	南堀江大通五丁目	
西道頓堀五丁目	南堀江大通六丁目	

西道頓堀六丁目	西道頓堀五丁目
南堀江一番町	西道頓堀六丁目
南堀江二番町	
南堀江三番町	

表 2-5　町丁目名変遷一覧表

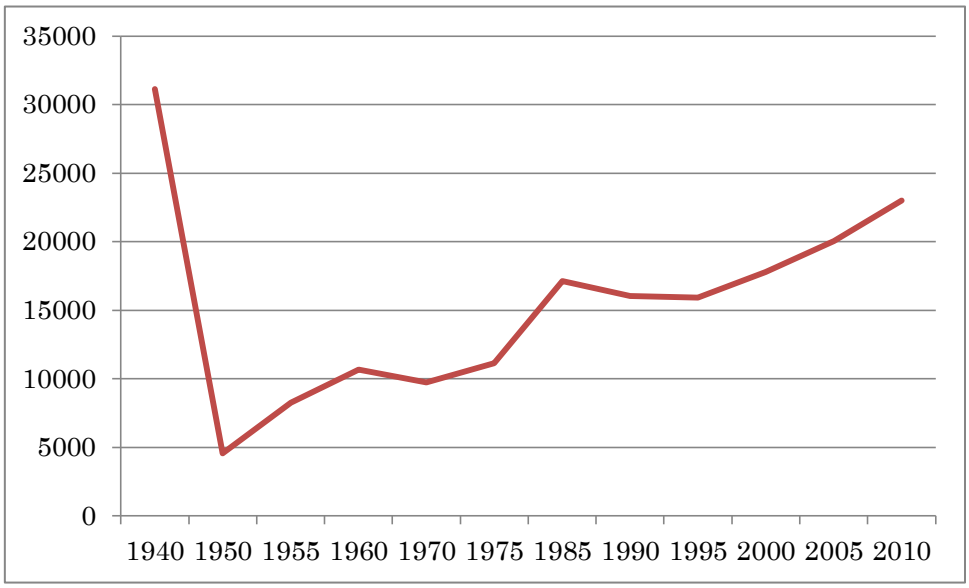


図 2-26　戦前から現在までの堀江人口推移グラフ（国勢調査より筆者作成）

①　現在

西区の人口は昭和 50 年に 5 万 0078 人と最低を記録するが、その後の都市再開発によって都心に位置する西区の居住性が再確認され、高層マンションの増加を見た結果、人口は微増傾向を保ち四回目の変動期を迎える。

図 2-26　昭和 50 年台に建設された北堀江四丁目の大型マンション

なお堀江地域の人口は昭和 50 年に微増するが、町丁目別の人口変動を見ると多くの地域では人口は依然現象傾向にあり、南堀江四丁目のように大型マンションが建設された一部の地域に限り激増していることから、西区全体から考えれば比較的早くにベッドタウン化の流れが到来したと言える。平成 2 年に 5 万 9,288 人をピークとし、平成 7 年には 5 万 8,674 人に減少する。

現在進行中である五回目の変動期は、平成 10 年代以降に迎えたタワーマンションをはじめとした高層住宅建設ラッシュと、立花通り[i]を「オレンジストリート」と呼び改め若者呼び込みへとシフトしていく時期である。折しもアメリカ村の雑踏、治安悪化を嫌った人々が、堀江の落ち着いたカフェに注目したことをきっかけに、ファッション業、カフェ、ギャラリーが矢継ぎ早に開業し、南北堀江一丁目から二丁目を中心に、繁華街を形成した。

図 2-27 タワーマンション建設ラッシュ直前の平成 10 年頃に建設されたマンション

図 2-28, 29：タワーマンション

この時期、西区の人口は平成 12 年に 6 万 3402 人と、平成 7 年から約 10%の増加を見たのち、その後も増加傾向を続けており、極めて近年の堀江地区に限った場合でも、平成１ 7 年には 1 万 9,403 人、平成 22 年には 2 万 2762 人、直近の平成 24 年には 2 万 3,011 人と、明らかな増加傾向にあり、また、年齢別人口分布を見るに、二十代から三十代の人口が突出しており、さらに五歳未満人口がそれ以降の年齢と比べて突出していることから、新たに結婚した世代がその生活の場として堀江を選択し、ここ数年の間に移り住んできた例が相当多いと考えられる。[ii]

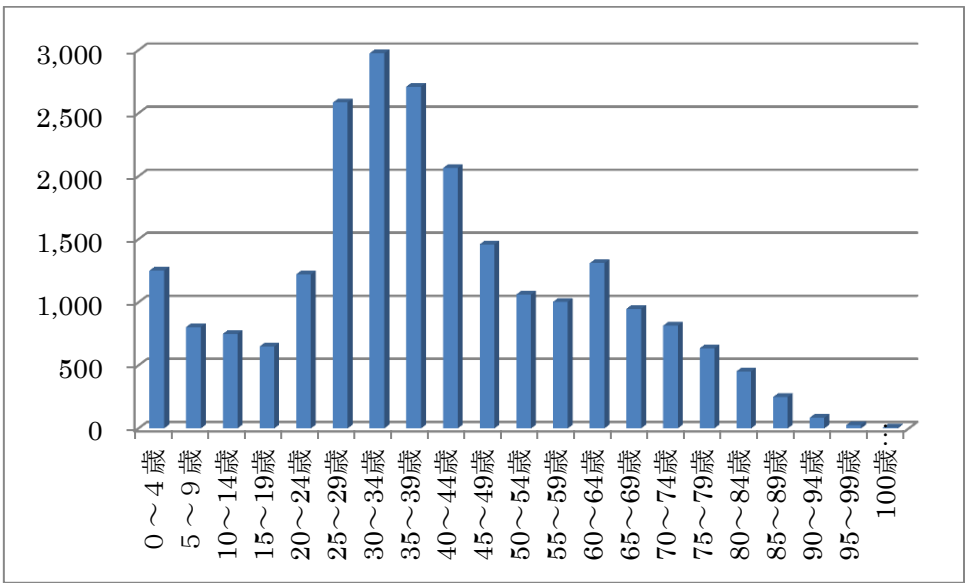


図 2-30　堀江地区年齢別人口分布（平成 24 年末日現在　大阪市西区 HP より筆者作成）

第３章　戦後の花街と家具屋街

前章においては戦後復興後の地区人口から復興後まもなく衰退期に突入した事実を示したが、本稿においては、住宅地図と国勢調査結果を用いて同時期から現在に至るまでの変化について述べる。

堀江遊郭

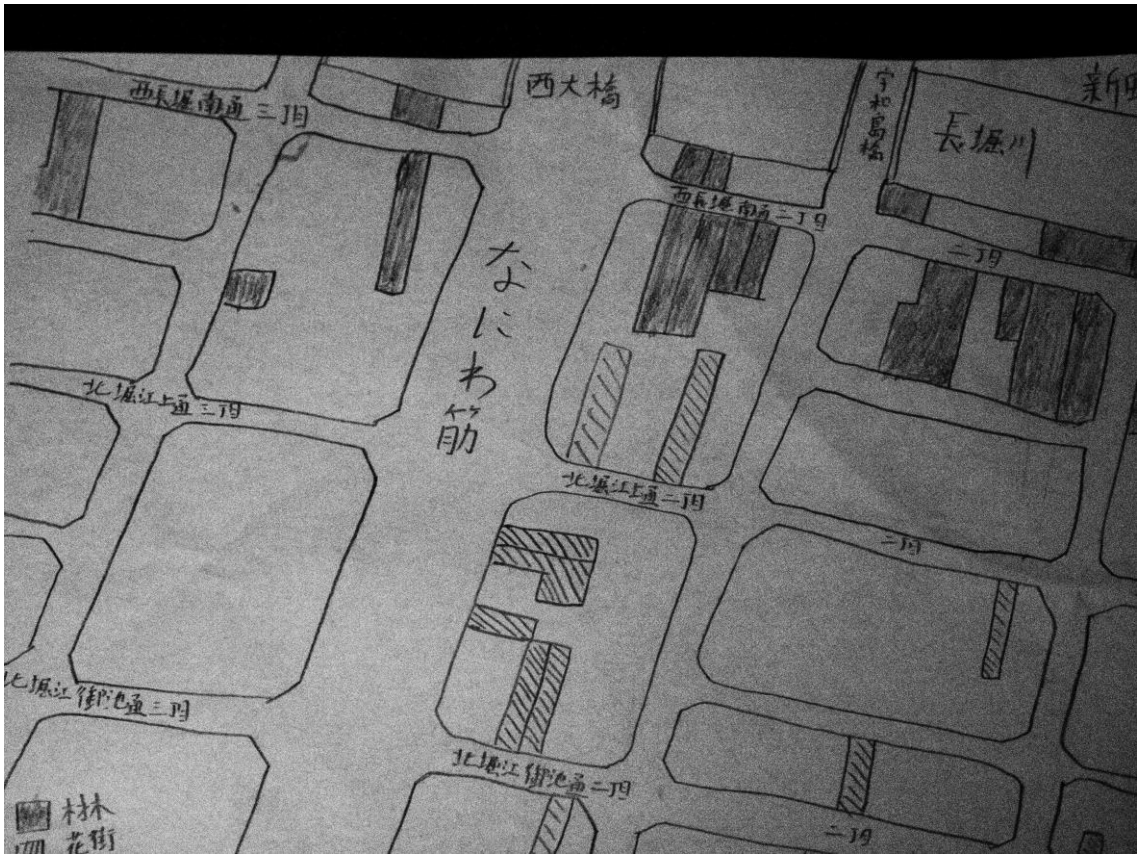


図 3-1　北堀江なにわ筋周辺昭和 43 年当時略図（住宅地図をもとに筆者作成）

堀江遊郭は戦後いわゆる赤線・青線地帯として復活することはなかったが、芸妓を置く料亭街として復興した。昭和 43 年の住宅地図からは、花街関係施設は北堀江上通二丁目に 4 軒、北堀江御池通一丁目、二丁目に 6 軒が確認できる。また、堀江遊郭北側の西長堀南通には水運の利を得て材木商が集積していたが、昭和 43 年時点でも同様の傾向が強く顕れている。ここからも、戦前と同じ産業が戦後も登場する形で復興が進められたと見られる。[26]

[26] ホテル、旅館、「〇〇家」は全て花街関係として計上

	鉱業	建築製造業	卸小売業	運輸通信業	サービス業	その他の産業	合計
西長堀南通一丁目	0	30	100	1	17	1	149
西長堀南通二丁目	–	–	–	–	–	–	–
北堀江上通一丁目	1	13	39	1	35	6	95
北堀江上通二丁目	0	22	47	3	52	10	134
北堀江御池通一丁目	0	9	83	0	11	10	113
北堀江御池通二丁目	0	16	99	1	85	12	213
北堀江通一丁目	0	56	101	0	22	19	198
北堀江通二丁目	0	35	55	4	15	3	112
北堀江一丁目合計	1	181	524	10	237	61	1014

表 3-1　昭和 40 年時点での産業別就業者数　国勢調査第二表より筆者作成

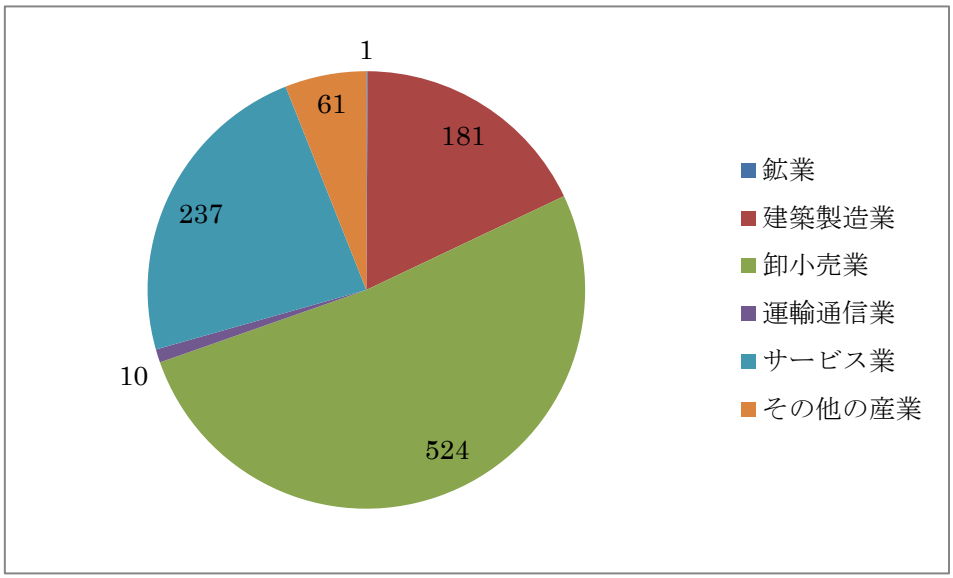


図 3-2　昭和 40 年当時現北堀江一丁目産業別就業者数　同上

産業別就業者人口統計によれば、ほぼ同時期の北堀江一丁目は就業者人口 1,014 人中卸小売業がその半数以上を占めるが、材木関係施設の占める比率の高い西長堀南通でそのうちの 100 人を計上している。また、サービス業就業者は花街関係施設の集中する北堀江上通と北堀江御池通で 237 人中 183 人と、実に 77%を占めている。

この後昭和 46 年には前述したように長堀川の埋め立てが終了、材木業者に大きな影響を与えることとなる。

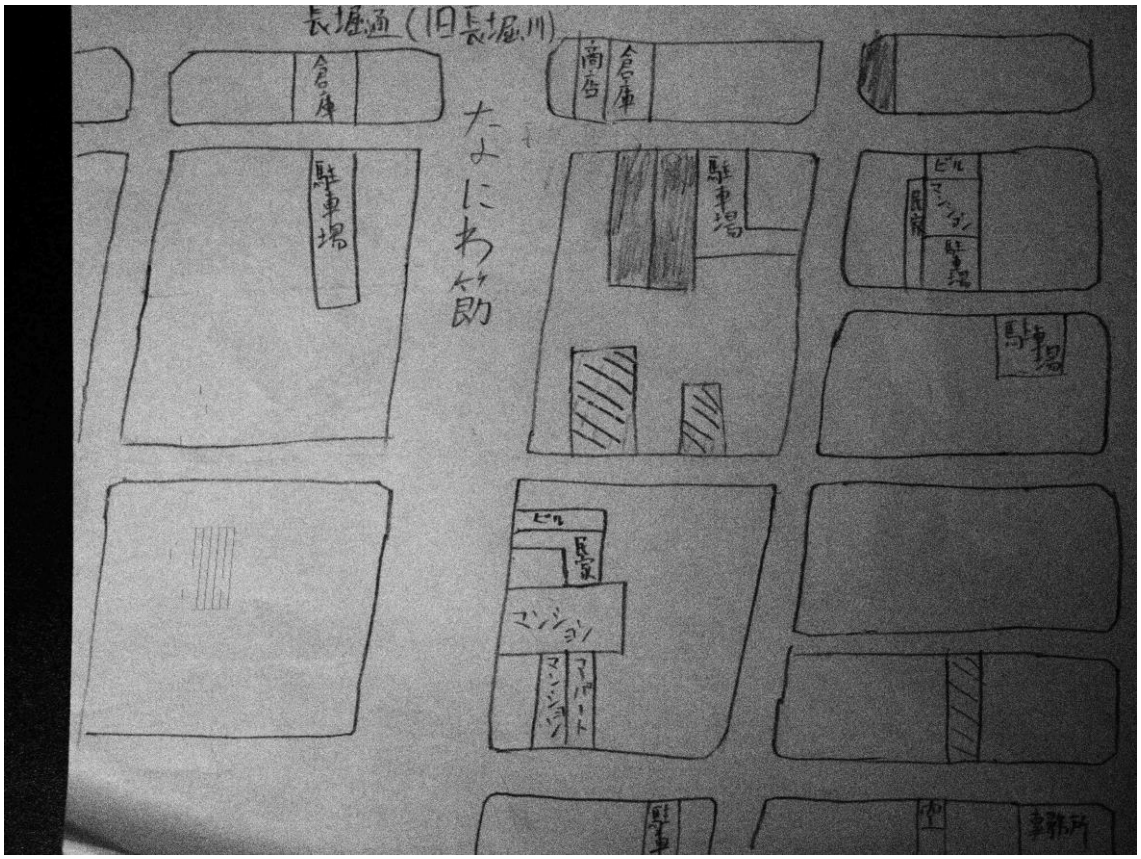


図 3-3　北堀江なにわ筋周辺昭和 53 年当時略図（住宅地図をもとに筆者作成）

昭和 53 年には花街関係施設がアパート・マンション、或いは駐車場に置き換えられ 3 軒まで減少、平成 26 年現在にはいずれもビル或いは民家に入れ替わり、堀江新地開発とほぼ同時期に発生して以来 300 年の歴史を有する堀江の花街は、平成を待たずして消滅した。

また、堀江の花街北側の西長堀は戦前以来材木業者が集積する地域であったが、昭和 43 年時点ではなにわ筋周辺の西長堀南通に材木関係施設 20 軒を数え、全く同様の傾向が見られる。しかし、長堀川埋め立て後の昭和 53 年には、花街関係施設と同様に減少し、駐車場、倉庫、マンション・アパート等へと置き換えられている。

	建築製造業	卸小売業	運輸通信業	サービス業	その他の産業	合計
西長堀南通一丁目	8	46	2	8	3	67
西長堀南通二丁目	2	29	0	6	2	39
北堀江上通一丁目	9	49	2	23	7	90
北堀江上通二丁目	11	65	4	19	15	114
北堀江御池通一丁目	11	34	1	17	6	69
北堀江御池通二丁目	23	96	2	45	13	179
北堀江通一丁目	10	53	0	14	19	96
北堀江通二丁目	25	56	5	16	16	118
北堀江一丁目合計	99	428	16	148	81	772

表 3-2　昭和 50 年時点での産業別就業者数　国勢調査第二表より筆者作成

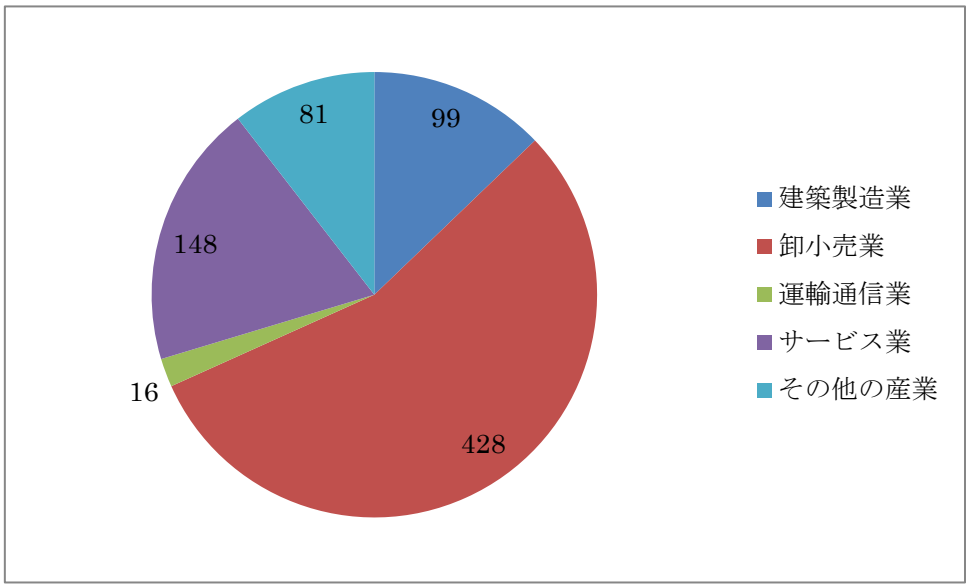


図 3-4　昭和 50 年当時現北堀江一丁目産業別就業者数　同上

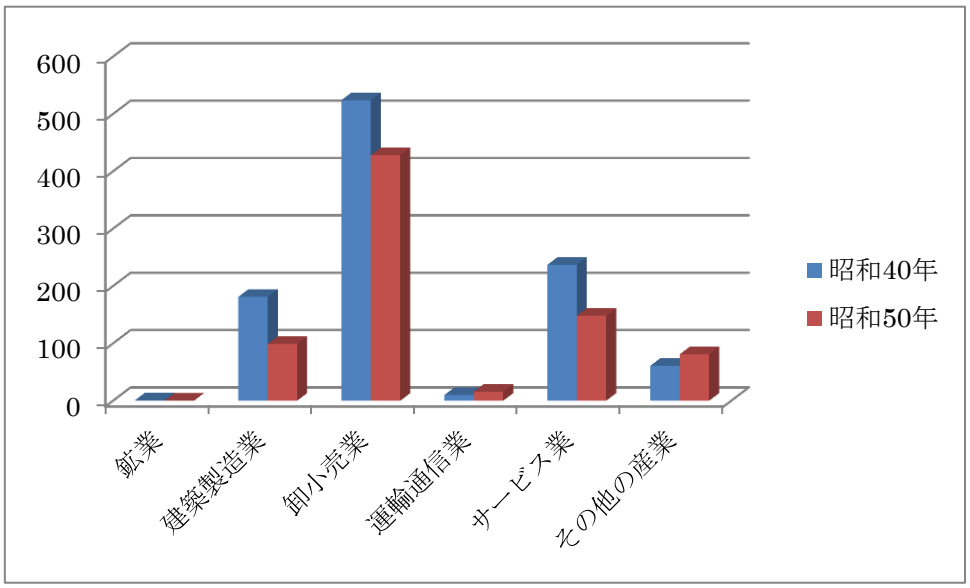


図 3-5　産業別従業者数推移　同上

同地域の衰退は、就業者数にも如実に顕れている。北堀江一丁目全体での就業者総数は 1,014 人から 772 人へと 20%減少しており、特に西長堀南通の卸小売業と、北堀江上通及び北堀江御池通におけるサービス業の減少が著しい。西長堀南通一丁目の卸小売業は 100 人から 46 人へと半数以下に、北堀江上通及び北堀江御池通におけるサービス業は 183 人から 104 人と 4 割以上減少している。

昭和 43 年から昭和 53 年までの間に、戦前以来堀江の中核を為した花街・材木の両産業が著しい衰退を見せ、久しからずして消滅した一方で、北堀江一丁目地区においてそれらに代替する新たな産業が発生することなく、前述したような「旧市街のベッドタウン」化が進行していたと看做すことができる。

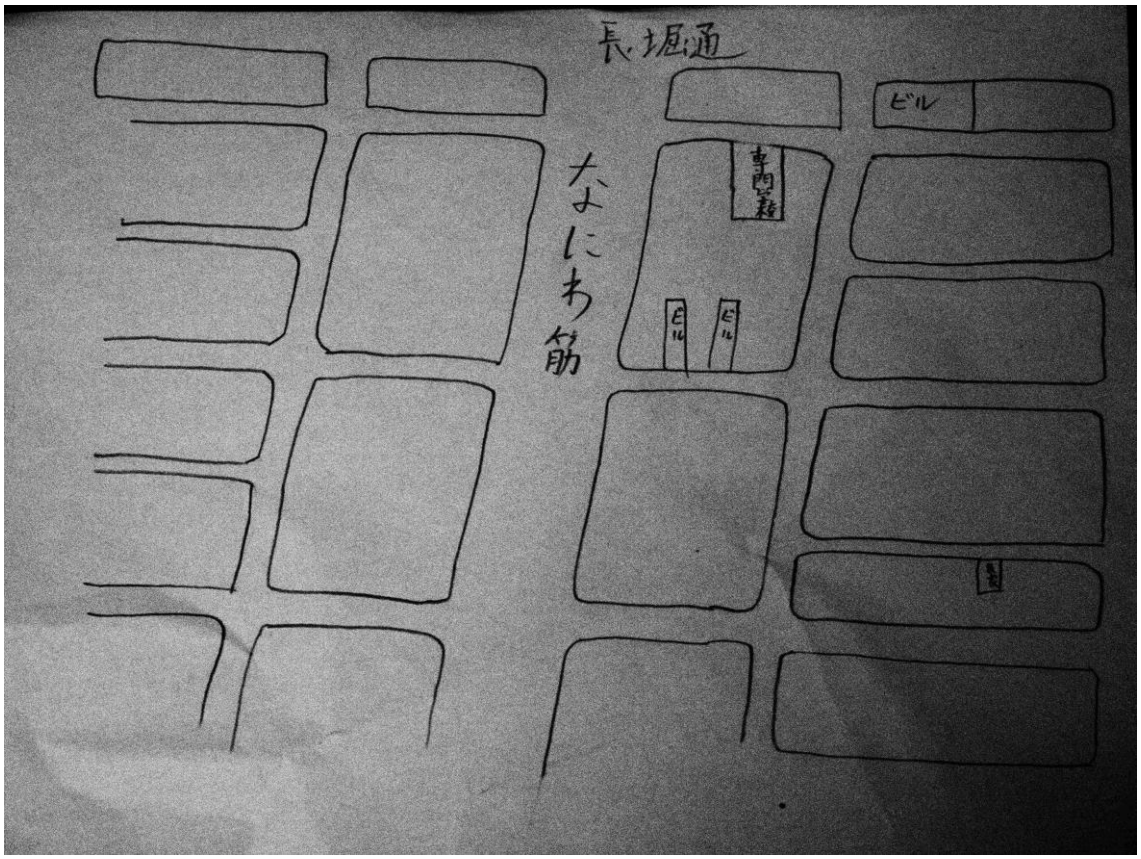


図 3-5　平成 26 年現在（住宅地図をもとに筆者作成）

平成 26 年現在、同地域に花街関係ならびに材木関係施設は 1 軒たりとも存在しない。花街関係施設は、僅かにその旧店舗 1 軒が民家利用され、その面影を今に留めている。

図 3-6　北堀江一丁目（北堀江御池通二丁目）に唯一現存する料亭の旧店舗、但し既に廃業

旧材木及び花街関係施設がいずれも商業ビルに移り変わっているのは、住宅或いは駐車場へ転用されていた昭和 53 年時点では見られなかった変化である。

北堀江一丁目付近は現在、図 31 の商業施設名称にもあるように、謂わば心斎橋から西側へはみ出した商業地域として捉えられている他、後述する立花通活性化の影響により、図 32 のような服飾店も増加している。

図 3-6　「心斎橋西」を地域名称とした宿泊施設

図 3-7　北堀江一丁目（旧西長堀南通一丁目）の服飾店

周防町通阪神高速一号線から　左図 3-8：西心斎橋アメリカ村　右図 3-9：南北堀江一丁目

堀江は心斎橋から西へとはみ出した商業地としての性質を有するとは謂え、その街路の雰囲気は大きく異なる。上図は堀江地区と心斎橋地区を隔てる阪神高速一号線下の同一地点からそれぞれ東西を撮影した写真であるが、東側の西心斎橋アメリカ村はピンク色の「高収入求人情報」や赤地に白抜きの「大阪名物」の看板が確認でき、一見して繁華街、或いは観光地と知れる一方、西側の堀江地区は街路樹が立ち並び、また目立つ看板も見られない。

平成一桁年代にはこれを以て「寂れている」と評されたが、現在では後の稿にて詳述する如く、「堀江」地区の特色となっている。

② 南堀江立花通周辺

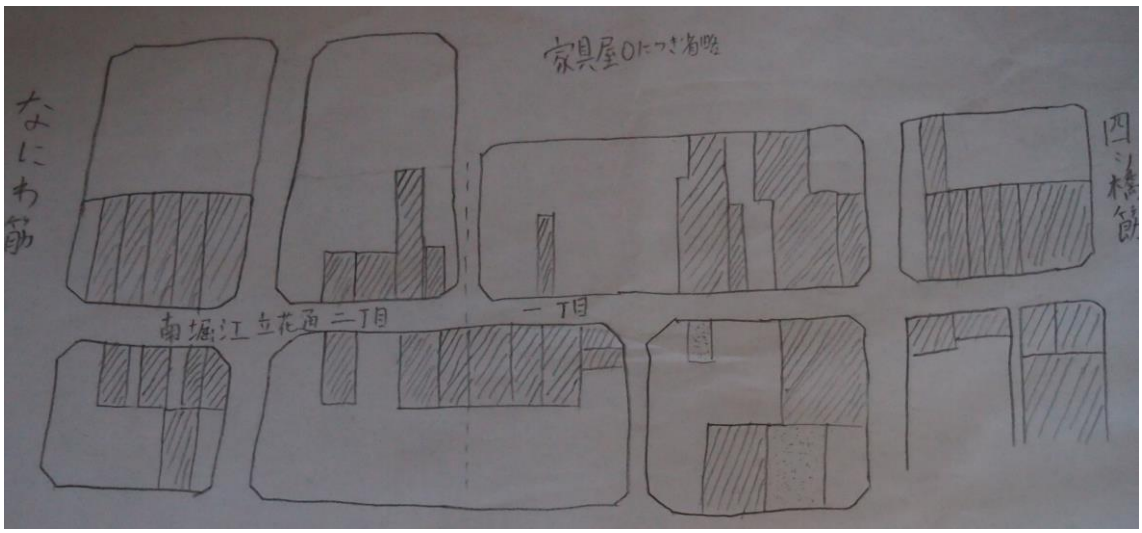


図 3-10　昭和 43 年当時南堀江一丁目立花通周辺家具屋分布図（住宅地図より筆者作成）

南堀江立花通り周辺は、前述した如く江戸時代以来家具屋が集積する地域であり、また、ここ二十年来で最も大きな変化を迎えた地域でもある。ここでは、特に変化著しい南堀江一丁目に範囲限り、街路利用変遷について述べる。

昭和 43 年住宅地図によれば家具屋約 40 軒を数え、戦前の 60 軒には数の上で及ばぬものの、通りのほとんどを家具屋が埋め尽くし、戦前とほぼ同じ形での復興が実現されたと見られる。

但し、戦後住民のほとんどが戻らなかったと前述したように、立花通もまたその例外ではなく、店名を確認した結果、戦前以来の事業者は僅か 6 軒に止どまり、殆どが戦後の出店である。

産業別就業者数統計によれば現南堀江一丁目地域において立花通の占める就業者数比率は 904 人中 351 人と、同地域において高いとは評価し難い。但し、立花通りの就業者数は卸小売業と建築製造業が突出しており、家具屋と家具工がこれを支えていたのは、先に挙げた図からも明らかである。また、かくの如く同一業者が集中していたことは、平成年代に入ってからの堀江活性化事業において主要な作用を及ぼす要因を形成した。

	建築製造業	卸小売業	運輸通信業	サービス業	その他の産業	合計
南堀江通一丁目	8	71	7	40	9	27
南堀江通二丁目	34	61	2	35	2	134
南堀江立花通一丁目	48	115	7	11	2	183
南堀江立花通二丁目	76	75	2	11	4	168
南堀江大通一丁目	9	25	2	51	2	89
南堀江大通二丁目	49	100	4	10	2	165
西道頓堀一丁目	–	–	–	–	–	–
西道頓堀二丁目	13	15	1	1	0	30
南堀江一丁目合計	237	462	25	159	21	904

表 3-3　昭和 40 年当時産業別就業者数　国勢調査より著者作成

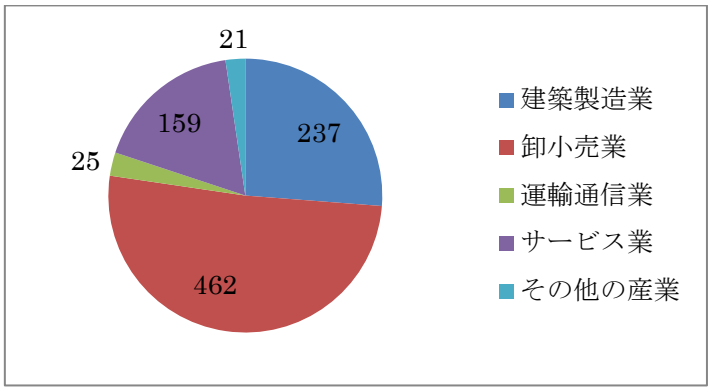


図 3-11　昭和 40 年当時現南堀江一丁目産業別就業者数　同上

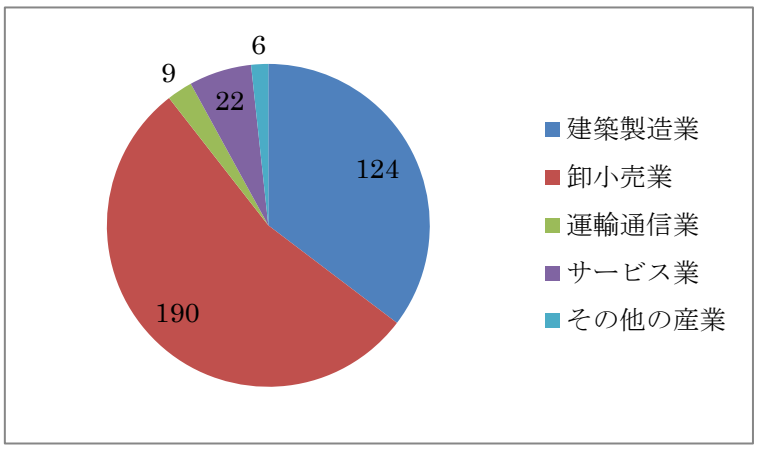


図 3-12　昭和 40 年当時南堀江立花通一丁目・二丁目産業別就業者数

	家具	問屋	飲食	駐車場	服飾・雑貨店	アパート・マンション	その他
昭和15年	60	16	1	0	0	0	4
昭和43年	39	5	1	2	0	1	2
昭和53年	34	4	2	2	0	2	2
昭和63年	28	4	3	6	0	2	3

表 3-4　立花通（南堀江一丁目）街路利用変遷（住宅地図より筆者作成）

	建築製造業	卸小売業	運輸通信業	サービス業	その他の産業	計
南堀江通一丁目	19	35	11	17	9	91
南堀江通二丁目	9	61	1	25	5	101
南堀江立花通一丁目	19	193	3	18	6	239
南堀江立花通二丁目	14	71	1	8	3	97
南堀江大通一丁目	14	29	0	47	1	91
南堀江大通二丁目	33	136	9	51	13	242
西道頓堀一丁目	0	1	0	1	0	2
西道頓堀二丁目	35	8	0	2	0	45
南堀江一丁目	143	534	25	169	37	908

表 3-5　昭和 50 年当時産業別就業者数　（国勢調査より著者作成）

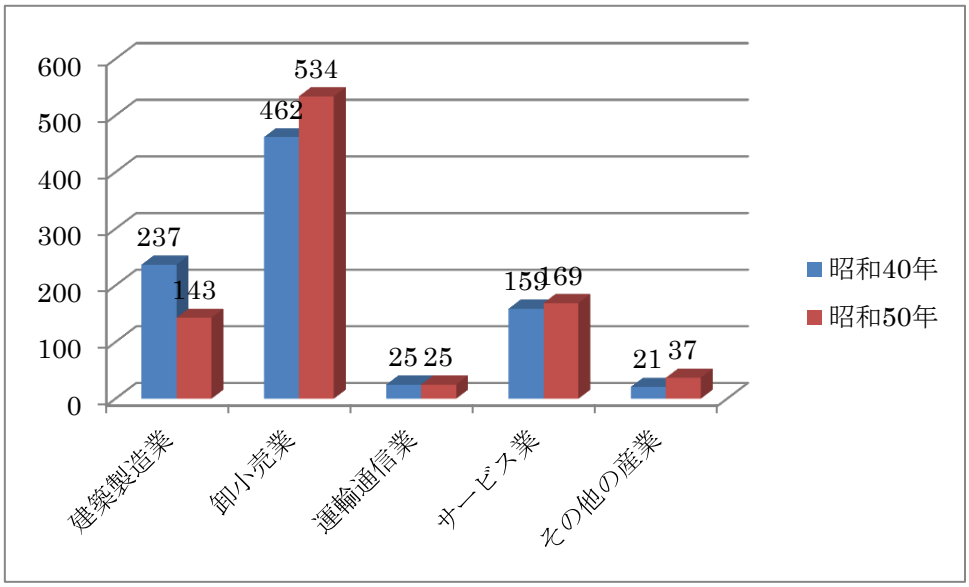


図 3-13　産業別就業者数推移（国勢調査より著者作成）

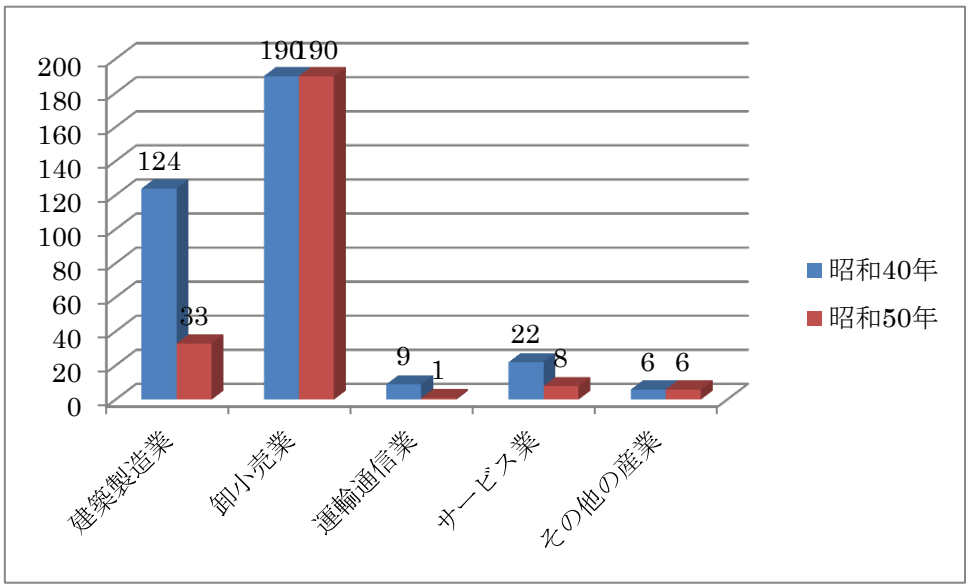


図 3-14　南堀江立花通一丁目・二丁目産業別従業者数推移　同上

家具屋の軒数は昭和 43 年の 39 軒から昭和 53 年の 34 軒と微減、この十年間で大きな変化は見られない。現南堀江一丁目全体での就業者数も横ばいである。但し、南堀江立花通一丁目・二丁目の就業者数を見ると、卸小売業就業者数は 190 人のまま変化が見られないが、一方で建築製造業が昭和 40 年の 124 人から昭和 50 年には 33 人と、激減している。街路の構成上には表れていないものの、家具屋の営業形態が、製造販売から販売のみへの移行を迎えたためと考えられる。

家具屋の軒数は昭和 63 年には 28 軒と更に漸次減少を続け、その一方で駐車場やアパート・マンションが増加し続けた。花街や材木関係施設が劇的に消滅へ向かった北堀江なにわ筋周辺よりは緩やかながら、衰退の一途を辿っていった。

しかし、後述するように当時は依然として家具需要が旺盛であったため、立花通の家具屋通りは、昭和年間に大きな変化を迎えることはなかった。

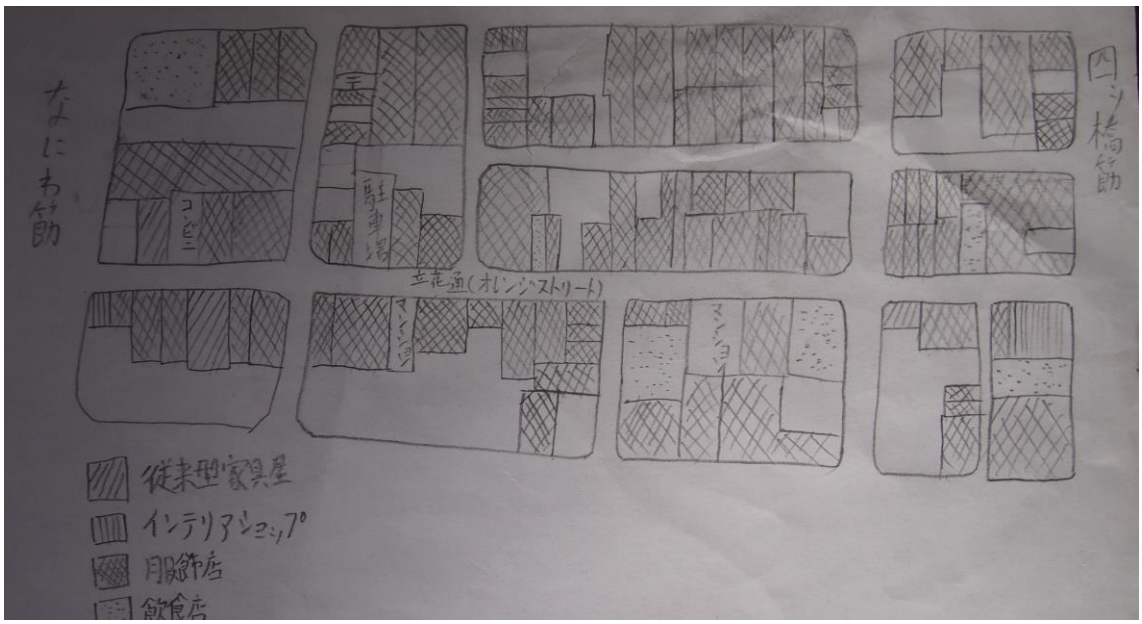


図 3-15　平成 26 年現在の南堀江一丁目立花通周辺（住宅地図と現地調査から筆者作成）

昭和末年から四半世紀余り経過した平成 26 年現在、同地域に家具屋はタンス等を主要商材とする従来型家具屋が僅か 3 軒にまで減少、インテリア家具店 2 軒が発生、合計 5 軒にまで減少し、「家具の街立花通」は消滅したと言っても過言ではない。

甚だしきは服飾店の増加であり、立花通だけでもその数 40 軒を超えているばかりか、その勢いは周辺街路に波及し、図 35 の地域だけで 100 軒以上となり、南堀江はブティックの街へと完全に様変わりした観がある。また、アパート・マンションは 1 軒を除き全て 1 階に店舗を具えており、何れも服飾店が入居している。

	家具	問屋	飲食	駐車場	服飾・雑貨店	アパート・マンション	その他
平成 26 年	5	0	2	3	45	7	2

表 3-6　南堀江一丁目立花通の街路利用（同上）

図 3-16　マンション路面が店舗となっている例

図 3-17　現在の立花通

図 3-18　立花通のマンション

前稿に於いて北堀江一丁目は心斎橋の延長的側面を有すると指摘したが、南堀江一丁目も同様の傾向が見られる。写真に示す様に、こちらでも地域名として「西心斎橋」を使用する住居が確認されており、また、立花通にて実施した聞き取り調査によっても、来街者の多くは、難波或は心斎橋を最寄り駅として利用していた。

堀江新地開発以来の伝統を有する家具屋街の消滅とブティック街への転身は、平成以降、現地の家具小売業者組合による主体的な取り組みにより、またその取り組みは立花通に止まらず、堀江を難波・心斎橋と連続した所謂「ミナミエリア」の一部として位置づけさせた。

図 3-19　大阪観光案内雑誌掲載例（まっぷる　大阪ベストスポットより転載）

第４章　「オレンジストリート」を中心とした取り組み

(1)平成以降の環境変化

平成年代に堀江地区が迎えた激変は、立花通りの家具屋街が構造的不況に直面したことを契機として始まった。家具屋の取り扱う家具自体の変化は、維新後従前の行李や長持ちから箪笥への大きな変化があったが、それが家具屋業者の再編をもたらすことは無かった。戦後公団住宅の登場によって洋家具の普及が漸次開始されるも、嫁入り道具が商いの中心であり続けたため、家具屋の取り扱い商品は、戦後初期のそれと大きく変化することはなかった。嫁入り道具需要は団塊の世代が結婚し、毎年 100 万組の新婚夫婦が誕生する昭和 50 年代から昭和 60 年頃にピークを迎える。

しかし平成元年前後、団塊の世代需要が一段落し新婚数が激減すると同時に、嫁入り道具の習慣自体が廃れ始めた。さらに平成 4 年には大店法規制が緩和される。和家具を中心商材とする従来の中小零細家具屋は構造的不況に直面し、立花通りは「二時間にお客一人猫一匹」と揶揄されるゴーストタウンと化した。

加えて同時期に近隣地域で大きな変化があったことも、堀江地区の立ち遅れ感に拍車を掛けることとなった。

阪神高速を隔てて東側に隣接する西心斎橋及び南船場は、昭和 50 年代に日限萬里子氏を仕掛け人として変化を開始、以来「アメリカ村」と通称される関西若者文化の発信地域として活況を呈した。

また、道頓堀川対岸の湊町地区は、大阪市都市構造再編プロジェクト「ルネッサなんば」において難波地区フォーターフロント地区として位置づけられ JR 湊町駅が JR 難波駅に名称を変更、94 年開港の関西国際空港との接続を意識したターミナル型複合商業施設「O-CAT」が開業した。

木津川対岸の千代崎九条地区にも、96 年に大阪ドームが開業する。

急速に変化を続ける周辺地域の中で堀江のみがエアポケットの如く取り残され、「旧市街」と形容されるようになった。

(2)立花通活性化委員会発足

1991 年、大店法規制緩和と同時に実施された中小零細商店街活性化資金政策を契機とし、当時の協同組合立花通家具修撰会理事長が「若いもんでなんかやれ」と要請、協同組合立花通家具修撰会及び立花通商店街のジュニアによって立花通活性化委員会が結成される。

しかし所謂「家具屋の兄ちゃん」に突然「街の活性化」の施策を勘案させるは余りにも荷が重く、大阪市経済局が 300 万円を負担してコンサルタントを派遣する制度を用意していたため、渡りに船と一年間契約したが、結果として、コンサルタント契約の効果はなかった。

コンサルタントはまず立花通のマークを作るところから着手したが、「家具屋の兄ちゃん」

らをして「ダサい」「まだしも自分たちの方が感性を持っている」と失望せしめ、契約を一年で打ち切ったのは勿論、行政への不信感を抱き、「家具屋の兄ちゃん」ら自身で活性化の方策を模索する結果となったのである。

まず「立花通」の名称が古臭いとして立花通商店会として愛称を募集、一千件の応募の中から「橘」に通じる「オレンジストリート」に決定する。

英国ポートベローやカムデンロックのアンティークフリーマーケットへの共感から、同年フリーマーケットを開始、約 2,000 名を集めて成功を収めるも、公道無断使用により警察から厳重注意を受け、以降駐車場等を利用して数年間継続する。しかしフリーマーケットは家具屋の売り上げへの影響乏しく、活性化に効果があったと評価することは難しい。

(3)ブランドイメージの設定

立花通活性化委員会は、委員会会員と個人的な知己でもあり、当時堀江に在住していたアメリカ村の仕掛け人である日限萬理子氏に意見を聴取した結果、「こんなん街活性化て（必要なのは）インフラでもなんでもないねん。オシャレな店集めるやろ、ほんならお客さん勝手に探して来よる。客を集めるのは、おしゃれな店を誘致したらええねん」との助言を得られた。

立花通活性化委員会はテナントを受け入れるに当たって、堀江の「ブランドイメージ」を強く意識することとなる。

また、街として提供すべき内容は、ヨーロッパの街に範を求めた。「おしゃれなファッション・インテリア・グルメ」の店舗が集積するロンドンのフルムフロードは、立花通とほぼ同一の規模であり、また、通りから少し外れると住宅となる点も一致している。また、ミラノやパリにも同種の街区が存在することから、これらを模範とした、家具・インテリア・ファッション・グルメのトータルビジネス、ライフスタイルショップの街とする方向性が固まった。

開発手法として、自分たちは大企業主導の「渋谷型」ではなく、「代官山型」であるとし、「上質な衣食住を提案」する「大阪の代官山」を志向することとなる。

ブランドイメージを形成、発展させる意識は徹底しており、「サラ金や風俗店」等、「不似合いな店や住人はお断り」との姿勢をとっている。これには、後に東京のある服飾店が入場制限をして客を道に並ばせ続けたところ、周辺住民からの苦情を受けてテナント主が直ちに賃貸契約を打ち切った実例がある。

(4)不動産業者との連携

当時アメリカ村及び南船場の発展が既に飽和状態に達していたことは、日限氏の助言を実行するにあたり、大いきな追い風となった。店舗面積が大きく、かつ商売が斜陽になっている家具屋が集積する立花通に、不動産業界からの注目が集まりつつあったのである。大阪進出を希望する東京の資本が多くあったが、心斎橋や南船場に店舗の空きはなく、ア

メリカ村は既に独自のカラーが固定されていたため、アメリカ村よりも「少し大人のファッション」の集積地の需要が高まっていた。

立花通活性化委員会が不動産業者に街活性化を目的とした連携を申し入れたところ、早速交渉が難航している物件についてのサポートを要請される。

フランスのブランドメーカーが立花通にて入居希望物件を見つけたが、該当物件は文久年間創業、三百坪の店舗を擁する九代目の家具屋であり、経営状況芳しくないものの「家具を辞めるのはご先祖に申し訳ない」と、異業種へのテナント貸しを拒んでいたのである。

立花通活性化委員会から、家具屋以外に衣食を揃えたライフスタイル提案をする街にするためにファッションは欠くべからざる重点であり、「気持ちはわかるが、あなたが一歩踏み込んだら他所も続くから」と拝み倒し、平成 12 年に大型ブティック出店に漕ぎ着けた。

但し、立花通活性化委員会と不動産業者との間の表立った連携は、活性化委員会がこれを金儲けの種にしているとの悪評を招いた。以降、立花通活性化委員会と不動産業者の連携は、立花通活性化委員会から不動産業者への情報提供に止まることとなる。

(5)堀江バブルの到来

平成 12 年の大型ブティック出店に加え、翌 13 年に元禄年間創業の仏具店が倒産したことも地元商店主の危機感を煽り、地域全体が急速に変化を開始した。

平成 14 年にはピーク時に 55 軒を数えた家具屋が 22 軒に減少した一方で、ブティックの他、カフェやアジア料理店が相次いで出店、同年発行された「堀江ヴェスティブル八月号」では 170 軒余りの店が紹介され、「堀江バブル」と謳われる活況を呈するに到った。同年、立花通りを中心とした南堀江界隈は大阪商工会議所より「大阪活力グランプリ」特別賞を受賞する。

図 4-1　北堀江に拡大するブティック街

(6)メディア戦略

前述した如く立花通活性化の主体は中小零細小売商店主の集まりであり、潤沢な資金力は之を有さない。よって、イベントをプレスリリースし、マスメディアに取り上げてもらうノンペイドパブリシティ方式を採用した。

大企業のように有料の広告を打たずとも、まず店を集めてインフラを整えた上で何かイベントを打ち、新聞・テレビ等のメディアに取材を呼びかければ、無料で取り上げられ宣伝になり、相乗効果が期待出来る。

西暦 2000 年以降メディアに取り上げられるようになり、関西民放全局と NHK、全てで特集される成功を収めた他、新聞各紙にもこぞって掲載された。

掲載紙	掲載年月日	記事見出し
産経新聞	平成 14 年 9 月 27 日	提案型ビジネスで「大阪の代官山」に
産経新聞夕刊	平成 15 年 11 月 4 日	ライバル誘致で自己改革
朝日新聞夕刊	平成 15 年 6 月 27 日	家具の街が生き返った
読売新聞	平成 22 年 5 月 22 日	乙女心で堀江に新風
大阪日日新聞	同年同月同日	「デコ下着」共同開発

表 4-1

近年では、堀江立花通ユニオンと大阪樟蔭女子大、短大との間に「女性に魅力的な街づくり」と「学生の就業力向上」を目的とする産学連携プロジェクト提携契約を締結、「デコ下着」を共同開発するなどのプロジェクトがメディアに取り上げられる等の成果を上げている。

第５章　「オレンジストリート」を取り巻く環境

(1)住民

立花通活性化委員会は「堀江バブル」に沸く平成 14 年に立花通家具修撰会から分離、「堀江ユニオン」と名称を改め、平成 16 年には立花通商店会と合併して堀江立花通ユニオンが発足、現在に到る。

堀江立花通ユニオンは旧立花通活性化委員会を中核とするが、町内会を主とした住民を巻き込んだ組織としての体裁をとっており、住民による会議への参加を受け入れている。

町内会組織に該当する組織として、明治十四年に分画された堀江連合振興町会、日吉連合振興町会、高台（たかきや）連合振興町会が存在、それぞれ小区画毎或いは大型マンション毎に組織される振興町会を下部に配している。堀江地域内居住者及び事業者によって構成され、餅つき大会、盆踊り大会、歳末警戒等、一般的な町内会としての活動を主とする。近年タワーマンション増加により新住民の増加著しいが、建設事業者によっては特約によりマンション単位で連合振興町会に加盟している場合もある。

堀江活性化について堀江立花通ユニオンとそれ以外の住民には温度差があり、必ずしも歓迎されていない。従前から居住する住民にとって活性化とは「騒がしくなる」ことを意味し、活性化による直接の恩恵を感じられない場合も多い。また、隣接するアメリカ村が「怖い街」、「人の住めない街」となったことも、住民による警戒感に拍車を掛けている。故にイベントでの公園使用、立花通りの店舗チラシ配布等について、堀江立花通ユニオンに対し住民の側から反対の声が上がる場合も存在する。

図 5-1　左：アメリカ村三角公園
図 5-2　右：堀江公園

店舗チラシ配布等に関しては、連合振興町会と堀江立花ユニオンの間で協議、ガイドラインを画定した他、連合振興町会の長老が抗議する住民を宥めるなどの処置がとられた。但し公園のイベント使用に関して連合振興町会は反対の立場を鮮明にしている。連合振興

町会は、住民の意見を代表するのに加えて、仲裁機能も有していると評価出来る。

堀江立花通ユニオンが設定したブランドイメージである「上質な衣食住を提案する街」、「少し大人の街」とは、隣接するアメリカ村と対照を為すべき側面が強い。よって、堀江立花通ユニオン側は住民側の「アメリカ村化」への警戒とそれにともなう苦情は、堀江のブランドイメージを維持する為に必要な意見として受け止めており、堀江立花通ユニオンとそれ以外の住民の間に存在する温度差は、現在深刻な軋轢を発生させるに至っていない。

図 5-3　堀江公園内に掲示されている看板

（2）家具屋

家具業界の構造変化と「オレンジストリート」を中心とした堀江活性化の取り組みを経て、かつては街路を埋め尽くしていた家具屋は、四通りの道を歩むこととなった。即ち、取り扱い商品群と店名を改め家具インテリアショップとしての転身をした店舗、家具屋を廃業してテナント業へ業態を変更した店舗、従来通りの商品を取り扱う店舗、倒産した店舗に分けられる。

家具インテリアショップへの転身に成功した店舗は 12 軒と数は多くないが、服飾店を受け入れる上で「オシャレな雰囲気」のお膳立ての役割を担い、また、堀江立花通りユニオンによる活動は、主に家具インテリアショップがその中核を担っている。

某家具インテリアショップへの聞き取り調査によれば、オレンジストリートの取り組みを開始した当初は時計などの雑貨を多く取り扱っていたが、次第に新婚や三十代夫婦を中心に本業である家具の売れ行きが伸張を見たため、雑貨取り扱いを漸次減少させ、今ではいずれの店舗も家具を主に取り扱っている。タワーマンションによる売上への影響は極めて大きく、ある店舗の若旦那は、「マンション名を聞くだけで所番地がわかる」ほど、多く伝票を書いていると語った。

図 5-4　家具インテリアショップへの転身例

最も多いのは家具屋を廃業してテナント業へ業態を変更した店舗であり、実に 30 軒以上を数え、街灯に付属している看板にも、家具屋らしき店名が多く見られる。業態変更後も住居を上階に構え続けている者之多く、ほとんどが芦屋などの郊外へ転居したアメリカ村と事情を異にしている。地域への愛着が強い者が多く、店舗前に列を作らせた店子を退去せしめた例を挙げたように、テナント業者として堀江立花通ユニオンへも積極的に参加している。

図 5-5　テナント業への業態変更例

従来通りの商品を取り扱っている家具屋は平成 26 年現在僅か 6 店舗を数えるのみにまで減少している。現存している店舗はいずれも跡取りのいない店舗であり、早晩廃業するものとみられる。直接の聞き取り調査を実施したところ、堀江立花通りユニオンによる取り組みとは無関係を強調されたが、堀江立花通ユニオン主催のイベントには参加していることから、積極的には運営に関わっていないものの、全て堀江立花通ユニオンにお任せという形で参加しているものと見られる。

図 5-6　従来通りの商品を取り扱う店舗例

堀江ブランディング戦略と従来通りの商品を取り扱う店舗との兼ね合いについては、平成 15 年の朝日新聞報道によれば東京から進出したブティック店主が仏具屋に「ファッションばっかりの街なら来ない。老舗の家具・仏具屋があるからこそ将来性を感じた」と語っていることからも、「家具・インテリア・ファッション・グルメのトータルビジネス」「ライフスタイルショップの街」の一部として好意的に受け止められていると見られる。なお、前出の仏具屋は既に業態替えをし、唐破風屋根の店舗にはそのまま服飾店が入居している。

図 5-7　唐破風屋根のブティック

以上はオレンジストリートの取り組み開始以前から存在した家具屋の類型について述べたが、これらに加えて、近年新規出店の家具インテリアショップも数件存在する。いずれも東京本社企業経営の店舗であり、立花通家具修撰会や堀江立花通ユニオンには加盟していない。

図 5-8　新規出店家具インテリアショップ例

(3)アパレル業者

現在服飾店は立花通を中心に 200 店を数え、服飾業は今や家具に取って代わり、堀江第一の産業となった観がある。堀江立花通ユニオンは街の独自色を打ち出すべく個性的な個人経営店舗の誘致を進めているが、東京本社企業の店舗が多いのが現状である。服飾店はリーマンショックのあった平成 20 年頃から客足が減少、平成 24 年の梅田再開発によって多くの店舗が梅田に引き抜かれる等の変動を経たが、現状空きテナントも存在せず、大きな潮流の変化は見られない。但し、大規模店舗が減少し、小規模店舗が増加する等の変化は見られる。

図 5-9　一軒の建物に二軒の小規模店舗が入居している例

堀江立花通ユニオンに参加しているアパレル業者は少なく、また、多くは堀江立花通ユニオン主催イベントにも参加していない。アパレル業者による団体・組織も存在せず、アパレル業者同士の交流は、私的な情報交換に止どまる。堀江地域に出店しているアパレル業者の多くが企業経営店舗であり、イベントなどへの参加は本社問い合わせとなるため、非常に消極的である。また、アパレル業者が独自にイベントを打つこともなく、「街の活性化」に対し積極的に動いているとは見做し難い。

但し、堀江立花通ユニオンアパレル業者は時代潮流に合致した変化を自身で行い、またどのような店舗が出店するかについても、既に「堀江」の街のブランドイメージが確立しているが故に、放任している現状で故障は特に存在しない。

(4)飲食関係

前述のように堀江地区には多様な飲食店が散在しており、インターネットグルメ・レストランサイト「食ベログ」には北堀江 225 軒、南堀江 163 軒が登録されている。カフェ・喫茶は平成 10 年、アメリカ村の仕掛け人日限萬里子氏が堀江公園隣にカフェを出店したのを契機として増加した。堀江地区に飲食店の組合は存在せず、堀江立花通ユニオンとしても能動的に誘致していないが、自然発生的に出店している。

堀江立花通ユニオンに参加している店舗は少ないものの、一部積極的な店主が旗振り役となりイベントに参加している。平成 26 年に実施されたアメリカ村の飲食店や立花通の家具屋・インテリアショップと連携しての「アメホリバル」には、72 店舗が参加した。

	レストラン	ラーメン	カフェ・喫茶	パン・スイーツ	バー・お酒	その他
北堀江	115	6	47	25	32	8
南堀江	108	6	57	27	18	6

表 5-1　堀江地区飲食店数　「食ベログ」より筆者作成（平成 27 年 1 月現在）

左：図 5-10 堀江公園隣のカフェ・バー

右：図 5-11 周防町通のカフェ・バー

第 6 章　成功の要因と現状の課題

(1)成功要因

平成年代以降に堀江地区が迎えた激変は、第 3 章にて詳述した立花通の商店主らによる活性化事業によってもたらされた。本稿では、活性化事業成功要因についてまとめる。

第一に、立花通りの住民による危機感が挙げられる。平成に入ってからの立花通りが「二時間にお客一人猫一匹」と揶揄されるゴーストタウンと化したことは既に述べたが、バブル崩壊が当初一般には一過性の景気変動と認識されていたことを想起すれば、これを以て家具業界の構造変化と見做し、変革の契機として主体的に動き出したのは慧眼と謂うべきだろう。

その背景として、立花通りの住民が当時強く意識したのは、大店法緩和規制による大型家具店の出現という制度変更による強力な同業者出現よりも、嫁入り道具需要の減少であった。嫁入り道具を披露する風習自体が廃れている現状を認識していたのは勿論、我国世代別人口の推移から新規結婚数自体の減少まで予想しており、嫁入り道具を主な商材とする家具小売業という業態自体が今後成立しないとの危機感が、立花通住民の間で共有された。先述したように、元禄年間創業の老舗仏具店が倒産した事実も、立花通住民の危機感を煽った。

第二に、周辺地域の事例が豊富なることも、活性化事業を大きく後押しした。阪神高速の高架を一歩越えた先の西心斎橋は、昭和 50 年代以降「若者の街」として様変わりし、年中若者がごった返す活況を呈しており、「二時間にお客一人猫一匹」の立花通と嫌でも対比せざるを得ない。これが立花通住民の危機感を強めたのは勿論、そのお客を何とか阪神高速・四ツ橋筋から西側の堀江に呼び込めまいかと垂涎の眼差しを向けるのも至極当然であり、アメリカ村の仕掛け人に助言を乞うたのは、極めて自然な流れと言えよう。これにより、新しい店を呼び込めば自ずから新しいお客が集まるとの、活性化事業の具体的な手法を獲得した。

第三に、活性化委員会、後の堀江立花通ユニオンが、行政に頼らず強いリーダーシップを振るった点である。立花通家具修撰会から三十代のジュニア世代に対し提示した「何か街の活性化をやれ」との要求は如何にも無茶な話ではあるが、これも先述した危機感が存在するが故に新たな取り組みを求めていたからであり、活性化委員会がリーダーシップを振るう土台が整っていた。また、行政による活性化支援事業に対し早々に見切りをつけた点も、住民、その中核になる活性化委員会が主体的に活性化の方向性を定めて実行しなければならないとの意識を強めた意味を有する。

結果として、活性化委員会は「上質な衣食住を提案する街」、「このブランドに合致しない業者は排除する」との明確な方針を示し、実行するに到った。

第四に、立花通が同一業者によって構成される街であり、堀江地区全体を見渡しても他に商店会が存在しなかった点も看過できない。同一業者であるが故に方針の決定が容易で

あった。前述したような現状認識の共有、家具インテリアショップ或いはテナント業へ業態を変更するとの具体的な方策の共有が、円滑に進められた。また、他に商店会が存在しなかったことも、活性化委員会による街のブランディングを進める上での強力なリーダーシップに有利な条件を提供した。

第五に、好立地である。西心斎橋と境を接する立地は、これまでにも述べたとおり、堀江をして一大繁華街ミナミの一部として拡大する対象として位置づけせしめた。テナント呼び込みに着手した際、不動産業者が「渡りに船」とばかりに飛びついたのも、立地条件を無視しては考え難い。

(2)今後の課題

堀江立花通ユニオン側への聞き取り調査によれば、後継者の育成が現在最大の課題として認識されている。一般に後継者不在が論じられる場合、他地域への流出等にその原因は求められるが、堀江立花通りにおいてはその事情を異にする。

曰く、各店舗とも事業を継承すべき者こそあれど、堀江立花通ユニオンの活動に必ずしも積極的に参加しておらず、「堀江立花通ユニオンは親の世代の組織であり、敷居が高い」との感覚が蔓延していると考えられている。なお、三十代の若旦那への聞き取り調査によっても同様の意見が確認されている。

「親の世代」によるこの種の問題意識は、前の代を単に継承するだけでは立ち行かなかった経験による危機意識と、自分たちの代が全く新しい街のビジョンを設定し、断行した成功経験を継承させたい願望により出ずるものであり、現在のところそれによる問題は顕在化していない。

既に堀江立花通ユニオンのジュニア世代によるミニ団体「堀江の会」が発足され、飲食店店主の四十代女性が中心となり、西区主催イベントのプロデュースを担当する等の実績を有する。

堀江の会中心人物の四十代女性は、神戸の震災後当時に転入した新規事業者であり、神戸や大阪御堂筋のルミナリエにも参画するなど、街活性化事業に対し積極的に参加する姿勢が多々見られ、彼女による今後の取り組みに対して堀江立花通ユニオンから高い期待が寄せられている。

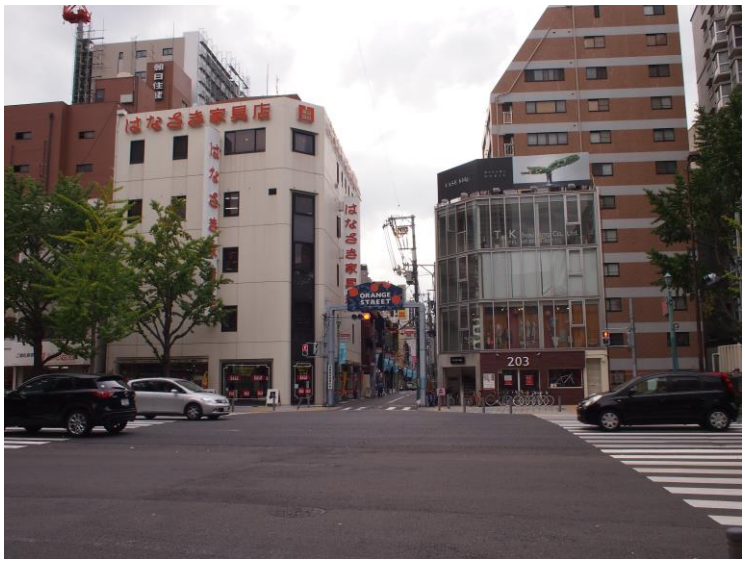


図 6-1　立花通りなにわ筋西側を望む

第二に、なにわ筋以西の断絶である。立花通は南堀江一丁目から三丁目まで１ｋｍ以上にわたって横たわっているが、南堀江一丁目と二丁目の間を貫くなにわ筋の東側に比して、西側は活性化の度合いに立ち遅れがある。なにわ筋手前の商店主への聞き取り調査でも、

来街者の多くがなにわ筋に突き当たると「街はここで終わりか」とばかりに引き返すのが手に取るように分かるとの証言が確認できた。

片側３車線の大通りを隔て、堀江来街者の多くが最寄駅として利用する難波、心斎橋方面から距離のあることもこの一因ではあるが、堀江ユニオンや不動産業者による計画が頓挫したのは、街区の統一性を乱す店舗の出現による。

図 6-2　立花通なにわ筋以西

関西地区で店舗を展開する、黄色を基調とした外装と派手な電飾を特徴としたスーパーマーケットが、立花通りの南堀江二丁目に出店した。

堀江ユニオンは景観及び来街者層への影響を憂慮し、出店計画が持ち上がった時点で反対運動を展開するも、当該スーパーマーケットを経営する企業の背後関係が複雑なるが故に頓挫、地主にも働きかけるがこちらも当該スーパーマーケットと同種の背後関係を有するため失敗した。

当該スーパーマーケット経営企業との交渉により、景観を破壊しない形での出店でひとまず合意するも、合意を無視する形での出店が強行され、堀江ユニオンはこれに抗議したが効果なく、民事訴訟もまた資金面の問題から断念、之に対しては打つ手のないのが現状である。

終章

本論文は大阪の起源から筆を起こしたが、飛鳥京の外港難波津、豊臣時代か徳川時代にかけての堀割による城下町開発と、前近代における大阪は「難波の八百八橋」と謳われる如く水都として繁栄を続け、徳川時代、堀江は四面を堀川に囲まれ街の中心にも堀江川が東西に貫く、正に水都の一部として登場した。

徳川時代に大阪で最も新しい新地として開発された堀江は花街、家具屋街が出現、水運至便なる天下の台所大阪の一部として発展し、その後は明治維新による制度慣習の変更、明治末年から大正にかけての産業化、空襲による街の焼失と住民の入れ替わりと、様々な紆余曲折を経たが、花街と家具屋街は戦後しばらくその姿を留めた。

戦後間も無く、交通の主役は水運から自動車へと移ろい、堀川は埋め立てられて高速道路や大通りへと置き換えられ、川沿いに居並んでいた材木商は自然と姿を消した。花街もまた、娯楽の多様化により昭和 40 年代から 50 年代にかけて瞬く間に減少した。徳川時代以来街を占めてきた産業が消滅した後には駐車場と集合住宅がその穴を埋め、かつては商業繁華の巷であった堀江は、大阪旧市街のベッドタウンへと没落していった。

家具屋街は嫁入り道具という大きな商材があったため昭和の間に大きな変化を迎えることはなかったが、風習の変化や制度変更の影響を受け、平成初年にはまったくのゴーストタウンと化し、変化が迫られることとなった。

そこで立花通住民が紆余曲折の末に出した答えは、「上質な衣食住を提案する街」への改革であり、自身の業態をインテリアショップへ改めるのと同時に、服飾店の誘致に取り掛かった。折しも隣接地域の繁華街が飽和状態に達していた時期であり、立花通にとどまらず、堀江の街は瞬く間にミナミの一部に取り込まれ、カフェ、ブティック、インテリアショップの街へと姿を変えた一方、旧来型の家具屋は姿を消し、ここに「家具の街」の歴史も幕を閉じた。

現在、堀江の町並みの中に花街、家具屋街、材木商、いずれもその姿を消し、僅かに和光寺と旧土佐藩邸内の土佐稲荷神社のみが徳川時代の堀江新地の面影を留めている。

左：和光寺境内阿弥陀池　右：土佐稲荷神社

筆者の所感を述べるに、まず、戦前堀江の写真を見て、美しいと感じた。堀川の巡らされた地勢は、正に東洋のベニスと謳われた大大阪の中心であると思わされる。また、近年「うだつのあがる町並み」なるものが観光資源として評価されているが、堀江は当時珍しかった鉄筋コンクリートや赤煉瓦以外は全て天下の台所大坂の面目躍如と謂うべき町家が甍を連ねており、この街並みが今に残っておればと悔やまれる。しかし、既に述べたとおり木造建築は一棟余さず昭和 20 年 3 月 14 日の大空襲により焼失しており、今更取り戻せるものでもない。

建物は戦後変化し、また商家の前掛けは戦後ジャンバーや背広に移り変わったものの、花街や家具屋といった江戸時代以来の産業は、戦後しばらく維持された。ただ、それも平成 27 年の今、皆姿を消した。

北堀江二丁目に現存する戦後再建された大阪格子の民家

産業の変化は時代の必然であり、それに直面した街は、その歴史の長さ或いはその立地を問わず、衰退を免れない。シャッター商店街となるか旧市街のベッドタウンになるか、また或いはチェーン店の立ち並ぶ没個性的な駅前商店街になるかは、立地の違いによって生み出される結果の相違に過ぎまい。

活性化には開発業者によって白羽の矢を立てられるか、住民による新たな取り組みを必要とする。その結果は何れにせよ、元の形を発展させるものでも、況してや過去の繁栄を

取り戻すものでもなく、現代に合致した全く新しい街が出現する。

堀江活性化は住民主導による取り組みの成功例であると同時に、徳川時代以来の歴史ある街堀江を、完全に過去のものとして位置付けた意味を有した。

近年、住民によって戦前の堀江を再現する活動が為された。昭和 15 年当時の堀江の町並みを職業別電話帳や住民の記憶を頼りに、路地の一本、駄菓子屋の一軒、公衆電話の一つに至るまで地図に再現した。終いにはその地図をもとに美術大学と共同してディオラマまで作り出し、現在は堀江小学校に保管されている。

堀江小学校　平成 25 年撮影[27]

[27]堀江小学校は日本初の小学校が設置された明治 6 年創立であり、「祝創立百四十周年　伝統を受け　未来へつなごう」の垂れ幕が見える

左：戦前堀江ディオラマ
右：主要な建物には札が付けられている

このディオラマを堀江小学校の児童に見せたところ、西六、即ち新町から通学している児童から「自分の家の場所がない」と苦情を受け、新町も製作することとなったと言う。

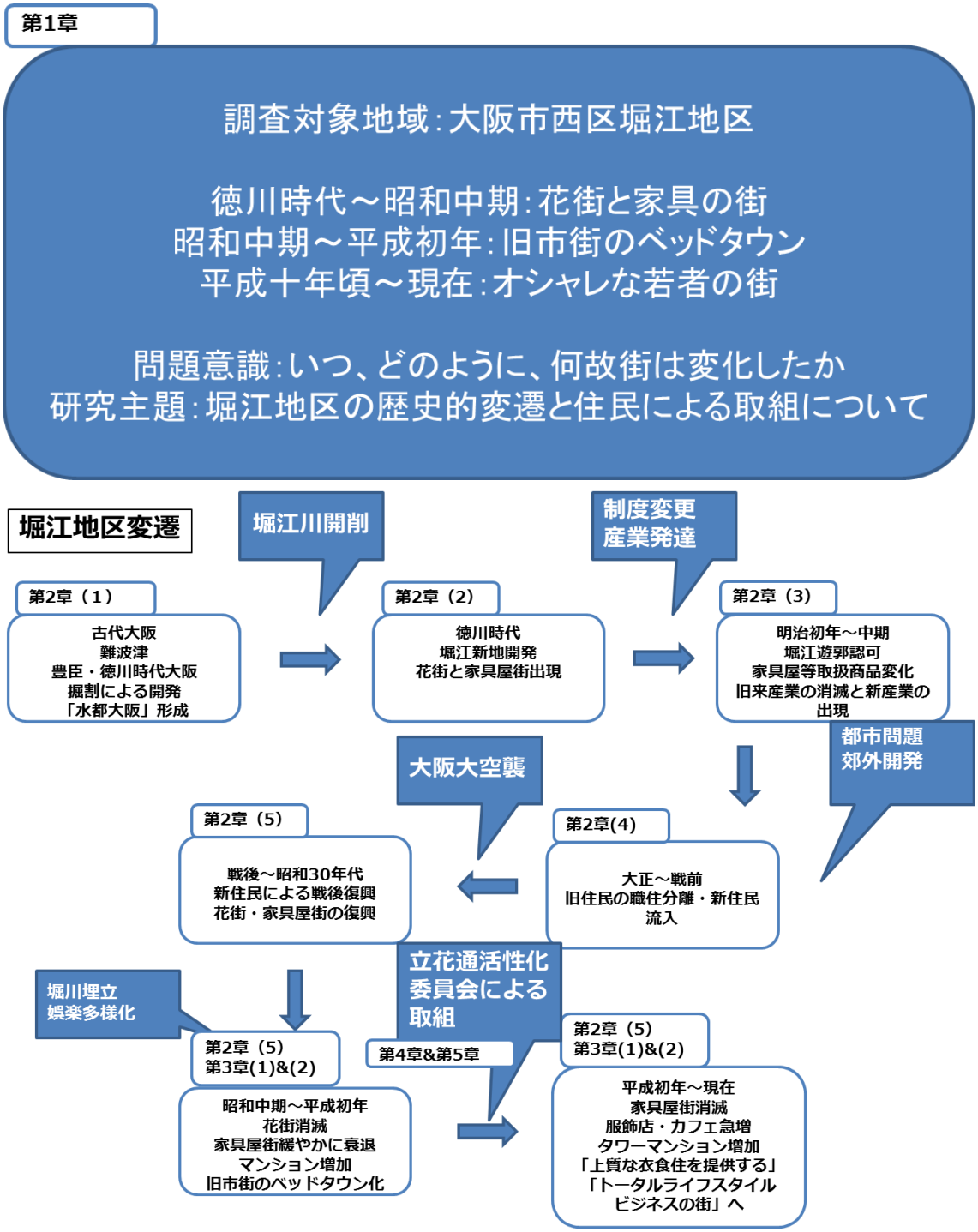
またこれも近年、住民の請願によって堀江公園内に堀江川の顕彰碑が建てられ、そこには大正 13 年に作成された大阪パノラマ地図が印刷された。

堀江パノラマ鳥瞰図

筆者には堀江川跡碑が、謂わば旧堀江の墓標に思えてならない。これは筆者の想像であるが、ディオラマにせよ堀江川跡碑にせよ、徳川時代以来平成に到るまで脈々と受け継がれてきた堀江の歴史に一段落がつき、「上質な衣食住を提案するトータルライフビジネスの街堀江」という新たな時代に突入した今、「花街と家具の街堀江」を仮初にも再現しようとの試みが為されたのではないか。

本論文の前段に当たる歴史部分が不要であるとの指摘を多く頂いたが、上記のような理由で旧堀江の歴史を総括する必要があった。後段は新堀江の歴史の序章を為すものである。

最後に、取材に応じて下さった団体、各商店の皆様と、四年間にわたってご指導いただいた浦野正樹教授に御礼申し上げるとともに、郷土の更なる振興を祈る。


第1章
調査対象地域：大阪市西区堀江地区
徳川時代～昭和中期：花街と家具の街
昭和中期～平成初年：旧市街のベッドタウン
平成十年頃～現在：オシャレな若者の街
問題意識：いつ、どのように、何故街は変化したか
研究主題：堀江地区の歴史的変遷と住民による取組について
堀江地区変遷
堀江川開削
制度変更
産業発達
第2章（1）
古代大阪
難波津
豊臣・徳川時代大阪
掘割による開発
「水都大阪」形成
第2章（2）
徳川時代
堀江新地開発
花街と家具屋街出現
第2章（3）
明治初年～中期
堀江遊郭認可
家具屋等取扱商品変化
旧来産業の消滅と新産業の
出現
都市問題
郊外開発
大阪大空襲
第2章（5）
戦後～昭和30年代
新住民による戦後復興
花街・家具屋街の復興
第2章(4)
大正～戦前
旧住民の職住分離・新住民
流入
立花通活性化
委員会による
取組
堀川埋立
娯楽多様化
第2章（5）
第3章(1)&(2)
昭和中期～平成初年
花街消滅
家具屋街緩やかに衰退
マンション増加
旧市街のベッドタウン化
第4章&第5章
第2章（5）
第3章(1)&(2)
平成初年～現在
家具屋街消滅
服飾店・カフェ急増
タワーマンション増加
「上質な衣食住を提供する」
「トータルライフスタイル
ビジネスの街」へ

本論文の構成

参考文献

浅野慎一他編『京阪神都市圏の重層的なりたち』昭和堂 2008 年 12 月 25 日
乾宏巳『近世都市住民の研究』清文堂出版 2003 年 10 月 28 日初版
大阪市西区役所『西區史第一巻』大阪市西区役所　昭和十八年九月十日
西区史刊行委員会『西区史第二～三巻』清文堂出版株式会社　昭和五十四年三十一日初版
『西区制１００年のあゆみ』西区制１００周年記念事業実行委員会　昭和五十四年
蒲田利郎編『南北堀江誌』南北堀江誌刊行會　昭和四年六月三十日
塚田孝『歴史のなかの大坂』岩波書店 2002 年 9 月 6 日第 1 刷
塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』山川出版社 2004 年 3 月 15 日第一版
塚田孝・吉田伸之編『近世大坂の都市空間と社会構造』山川出版社 2001 年 2 月 15 日初版
水知悠之介『近代大阪と堀江・新町』新風書房平成二十三年十月二十日
なにわ堀江１５００『堀江戦前住宅地図』新風書房
吉見俊哉『都市のドラマトゥルギー』河出文庫 2008 年 12 月 10 日初版
若林幹夫『都市への／からの視線』青弓社 2003 年 10 月 12 日第 1 刷
『マップルマガジン　まっぷる　大阪ベストスポット』昭文社（発行年月日不詳）

参考資料：

『大阪市精密住宅地図　OSAKA 西区』吉田地図株式会社　各版
『大阪市 HP』http://www.city.osaka.lg.jp/nishi/page/0000009336.html ２０１３年６月２４日最終閲覧
『大阪市西区 HP』http://osaka-nishi.com/index.html 2013 年 7 月 11 日最終閲覧
オールアバウト http://allabout.co.jp/2013 年 7 月 11 日最終閲覧
食べログ http://tabelog.com/2015 年 1 月 7 日最終閲覧
天佑神助 http://tenyusinjo.web.fc2.com/profile.html2013 年 7 月 11 日最終閲覧
西区コミュニティネット http://www.osakacommunity.jp/nishi/2013 年 7 月 11 日最終閲覧
ミュゼ大阪 http://www.muse-osaka.com/2015 年 1 月 7 日最終閲覧
堀江連合第十四振興町会ＨＰhttp://www.baycom.zaq.ne.jp/horie-dai14/2015 年 1 月 7 日最終閲覧